



# JAAGAだより

日米エアフォース友好協会  
Japan-America Air Force Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会  
〒160-0002  
東京都新宿区四谷坂町9番7号  
ZEEKS 四谷坂町ビル 3F  
編集：JAAGA事務局  
印刷：アロー印刷株式会社  
ホームページ：http://www.jaaga.jp/



## JAAGA 創立 20 周年記念特集号 Special number featuring articles on the 20th Anniversary of the Foundation of JAAGA

### JAAGA 会長挨拶 岩崎 茂

1996年(平成8年)7月5日、会員約200名、法人約30の会勢で発足した日米エアフォース友好協会(以下「JAAGA」という。)は、本年創立20周年を迎えることができました。これもひとえに初代会長大村平先輩をはじめ多くの日米両国の関係各位の御支援御協力そして御厚情の賜物と深く感謝申し上げます。

さて、JAAGA 創立 20 周年を迎えるにあたり、JAAGA 設立当時に諸先輩方が何処に設立の意義を置いておられたかについて想いを馳せました。20年前の設立前夜、残念ながら日米両国間には各種の問題が山積し必ずしも良好な状態には無かったことを御記憶の方もおられるでしょう。その様な状況の中においても、空自と米空軍間では、同じエアパワーを発揮する同盟国間のミリタリーとして、双方の力量を尊敬しつつ良好な関係を保っておりました。

その日米エアフォース相互の信頼と絆の関係をベースに、当時空自 OBとなられていた諸先輩は、如何に日米エアパワーを担う現役諸官の努力を支援出来るのか、また、如何に本国を離れ日米安全保障体制の現場を担う在日米空軍将兵や家族を励ますことが出来るのかを真剣に考えられたと伺っております。空自 OBとしての想いを発露し、在日米空軍の存在と活動に対する感謝を伝え、彼等の日本における存在が真に意義あるものであることを実感してもらうための活動母体として JAAGA が設立されたと理解しています。この地道な活動が、空自と米空軍との信頼関係を一層深め、現役諸官が日米相互の仕事を作り易い環



境を醸成する縁となり、ひいては、わが国の安全と平和に不可欠な良好な日米関係を支えるバックボーンの一つになってきたのではないかと考えております。

時代の流れの中で、放置すれば疎遠になりかねない要因が国家間の関係には潜んでいます。国内外のわが国を取り巻く情勢は決して予断を許すものではありません。わが国にとって強固な日米安全保障体制が以前にもまして重要であり、日米間の信頼を高める常続的努力が欠かせない事は論を待ちません。その中でも、日米エアパワーの強い紐帯の確保はその核心の一つです。私は、その核心を支える一端を JAAGA が担っていると確信するとともに、会員はじめ関係者の方々と共に設立時の趣旨と日米エアフォースに対する熱き想いを共有しつつ、JAAGA 活動の更なる進化発展のため、会員はじめ関係各位とともに前進していく所存ですので、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



**Greetings from JAAGA New President  
Gen. Shigeru Iwasaki (Ret.)  
Former Chief of Staff, Joint Staff**



JAAGA started with approximately 200 members and about 30 supporting members (individual, corporation, organization) on July 5 in 1996. We celebrate its 20th anniversary this year. We deeply thank the support, cooperation and kindness of the many members concerned of both Japan and the United States, including the first president Gen. Hitoshi Ohmura (ex- Chief of Staff, JASDF, Ret.).

For the past 20 years, JASDF and USAF, as the allied nation's military air power, have been respecting each abilities and keeping good relations together. In the JAAGA foundation period of 20 years ago, I heard that the seniors of JASDF alumnus had serious thought, based on the trust and bond of each air force, how they could support and repay the efforts of the active duty members of JASDF and USAF, and how they could encourage the USAF soldiers and their families staying in Japan who carried out Japan-US security arrangements.

JAAGA was founded, as mother's body for activities of JASDF alumnus, in order to have USAF to realize the significance of existence of USAF in Japan, and introduce our appreciation and goodwill into the activities of USAF in Japan. The steady activities of JAAGA have further deepened the mutual trust between JASDF and USAF, and have bred the environment for active members to smoothly accomplish their duty, thus, I believe, JAAGA's activities have been one of the backbone to support the good Japan-U.S. relationship which is indispensable for security and peace of Japan. Under the situation of troubles both domestic and abroad, the importance of the strong Japan-U.S. security system increases more and more for our country, and we cannot miss the continuous efforts which improve the trust between Japan and the United States. I am convinced that JAAGA plays the core role for these efforts.

I will make every possible effort and go forward together with the members of JAAGA, sharing both the purpose at the very time of the foundation and the enthusiasm for JASDF and USAF, to enhance further evolutionary development of JAAGA activities.

**初代会長に大村元航空幕僚長**

— 奉仕の精神を忘れずに —



7月5日に開催された設立総会において、初代会長として大村元航空幕僚長が全会一致で推挙された。また副会長には鈴木元航空幕僚長と松村元補給本部長が、理事長には石塚元航空幕僚長がそれぞれ指名された。総会には約50名の会員が出席、昨年来中心となって準備調整に当たった鈴木委員による趣旨及び経緯の説明が行われ、次いで石川委員による会則、事業計画、長谷川委員による財務報告等が行われた。

当初の会勢として会員約200名、法人約30社の参加を得て発足することとなった。大村会長は、就任第一声で、日本及び航空自衛隊への最後の奉公だと思っ努力するという所信を述べた。また発足当初の試行錯誤に当たっては、設立の趣旨を守りながら柔軟に運営したいという希望とともに、全会員に対し奉仕の精神をもって尽くすよう要望した。



**Launching Ceremony of JAAGA**

Opening Remarks by the first president  
Gen. Hitoshi Ohmura, ex- Chief of Staff, JASDF (Ret.)

July 5 1996

The first launching session  
“KAGAMI-BIRAKI(鏡開き)”



航空幕僚長  
空将

杉山 良行  
Gen. Yoshiyuki Sugiyama  
Chief of Staff, ASO



第5空軍司令官  
空軍中将

ジョン・L・ドーラン  
Lt.Gen. John L. Dolan  
Commander, 5th Air Force



日米エアフォース友好協会(JAAGA)が設立20周年を迎えられましたことに心からお祝いを申し上げます。また、岩崎会長をはじめ、名誉会員の歴代第5空軍司令官の皆様やこれまで会の活動に携わってこられた日米全ての会員の方々には、共同訓練に臨む隊員への激励や文化交流支援など、これまで一方ならぬお力添えを賜り、心から感謝いたします。

貴協会は、平成8年、航空自衛隊と米国空軍相互のより良い信頼関係を築いていくために空自OB有志により立ち上げられたと承知しております。この頃は、日米間の経済関係の悪化や米兵による暴行事件等が日米安保体制に暗い影を落としていた時期であり、設立当初の活動には多くのご苦勞があったものと察します。それら乗り越え、今日の隆盛を成し遂げられた先輩諸兄の使命感と熱意に深い敬意を表します。

貴協会の活動は年を重ねる毎に幅を広げ、現在、「共同訓練に対する慰問品の寄贈」、「日米優秀隊員の表彰」、「米軍基地表敬訪問」、「スポーツ大会やボランティア活動を通じた日米交流」など多岐にわたっています。我々現役自衛官も、貴協会が企画するイベントを通じて、米国空軍の方々とプライベートな面でも交流を深めており、隊員の中には、家族ぐるみのお付き合いをしている者もいます。年々、日米隊員相互の絆が強く太くなっていることが実感でき、誠に喜ばしく感じている次第です。

近年、我が国を取り巻く安全保障環境は厳しさを増しています。そのような中、「日米同盟」は、日本のみならず、アジア太平洋地域、更には世界全体の安定と繁栄のための公共財としてその重要性が認識されています。強固な同盟を維持するためには、協定等の充実や共同訓練の深化といった目に見えるものに注目が集まがちですが、相互の友情や信頼、尊敬といった無形の要素も重要であると考えます。我々も引き続き、日米共同の実効性向上に鋭意取り組んで参ります。貴協会におかれましては、今後とも、航空自衛隊と米国空軍の架け橋として、両組織の更なる融和と発展にお力添えを頂きたくお願いいたします。

末筆となりましたが、貴協会の益々のご発展と会員皆様のご多幸とご活躍をご祈念申し上げまして、日米エアフォース友好協会創立20周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

To all the member of the Japan-America Air Force Goodwill Association, on behalf of all the men and women of Fifth Air Force, congratulations on 20 years of promoting mutual understanding and friendship between the Japan Air Self Defense Force and the U.S. Air Force.

I would also like to offer my sincere gratitude for all the advocacy and support your organization has done for the JASDF, the USAF and the Japan-U.S. alliance through friendship events like the JAAGA Golf Tournament to exchange programs between our airmen, your support has made a difference.

For more than 50 years, the U.S.-Japan Alliance has been the foundation of peace and security in Northeast Asia and the cornerstone of U.S. engagement in the region; and the support of JAAGA has certainly played a significant role in that success.

The Japan-U.S. alliance matters today more than ever. The Rebalance to the Indo-Asia-Pacific that America began several years ago recognizes this fact. The transformation of the U.S.-Japan relationship on both economic and security fronts, and the breadth and depth of our cooperation in terms of our defense relationship, is at historic levels.

I can honestly say that you have met and continue to meet your goal of improving mutual trust between Japan and the United States through our two air Forces.

Once again, thank you and congratulations on your 20th anniversary!

(要旨仮訳)

日米エアフォース友好協会会員の皆さん、空自と米空軍間の相互理解と友好促進の20年間に対し、5空軍将兵すべてを代表しお祝いを申し上げます。

更に、JAAGA主催ゴルフ大会も一つの例ですが、JAAGAが日米両兵士間の友好行事を通じ空自、米空軍そして日米同盟を支持・支援して下さることに衷心より感謝します。

50年以上もの間、日米同盟は、北東アジアの平和と安全の基盤若しくは当該地域での米国関与の礎石であり、そしてJAAGAの支援はその成功に重要な役割を演じました。

日米同盟は、今日ますます重要です。米国が数年前開始したインド～アジア～太平洋へのリバランスは、まさにその証左です。経済と安全保障及び日米防衛関係の幅と深さの変革は、歴史的なレベルに達しています。

私は、JAAGAが両空軍を通じ日米相互の信頼を促進するという目標に出会い、今後もその進展に寄与し続けると確信します。

改めまして、ありがとう、そして創立20周年記念日におめでとう！



防衛大臣  
衆議院議員 中谷 元  
Mr. Gen Nakatani  
Minister of Defense



つばさ会会長  
吉田 正  
Gen. Tasdashi Yoshida (Ret.)  
President of JASDF Veterans  
Association "Tsubasa-Kai"



日米エアフォース友好協会創立20周年誠にありがとうございます。

近年、航空自衛隊と米軍との関係は大きく深化しました。平成24年に航空総隊司令部等が横田へ移転し、平素から在日米軍と緊密に情報共有等を行う環境が整いました。さらに、昨年4月の18年ぶりとなるガイドラインの改定により、日米同盟はより強固なものとなりました。訓練についても、貴協会から例年激励を賜っておりますコープ・ノース・グアムやレッド・フラッグ・アラスカに加えて、昨年は、初めてオペレーション・クリスマス・ドロップにも参加しました。

このように航空自衛隊が米軍と益々緊密に活動できますのは、貴協会からの20年にわたる御支援があつてこそのものであり、深く御礼申し上げます。

我が国を取り巻く安全保障環境が一層厳しさを増し、米軍との関係が益々重要となる中で、貴協会におかれましては、航空自衛隊と米軍との架け橋として、今後ともより一層の御支援・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ではございますが、貴協会の今後益々の御発展と、岩崎会長を始め会員の皆様の御健勝と御多幸を祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

日米エアフォース友好協会20周年おめでとうございます。

JAAGA は、つばさ会の付属組織として創設以来、航空自衛隊と米空軍の相互理解と友好親善の増進に貢献されてきました。

近年、わが国を取り巻く軍事環境の変化は流動化、加速化が進むとともに、ますます厳しさを増し、わが国が独立国家として国民の安全、安心を確保するためには日米安全保障体制をしっかりと維持し、その実効性を確保することが最も重要な点であることは論を待ちません。

航空自衛隊と米空軍は、従前から多種、多様な面で交流を持ち、作戦運用、教育訓練、装備等、日米共同運用体制の強化に努めてきております。

就中、航空総隊司令部の横田移転を通じてその強化は目覚ましいものがありますし、また、多年にわたる米空軍への留学生の派遣は教育を受けるのみならず、心の交流を通じ人的面からの繋がりはその裏打ちをなすものとなっています。

JAAGA は、航空自衛隊の OB となった方々が、現役時代に培った友人関係等をもとに現役同士の連携に縦、横、斜めからの繋がりを強化し、さらなる強固な関係を保てるよう協力することに意義があり、今後とも一層の努力をしていただきたいものです。

近年、JAAGA 特別会員として、元 PACAF 司令官等を迎えられたことと伺っていますが、人と人の繋がりが全ての根源であると思います。

ここに JAAGA の活躍の場が見出せるものと思います。

今後も日米安全保障体制が強固なものとなるよう JAAGA が側面から現役を支援されることを期待いたします。



Mr. Gen Nakatani, Minister of Defense  
with Mr. Ashton B. Carter, Secretary of Defense



JAAGA 名誉会員  
元第5空軍司令官  
米空軍退役空軍大将  
リチャード・B・マイヤーズ  
Gen. Richard B. Myers (Ret.)  
JAAGA Honorary Member



JAAGA 名誉会員  
元第5空軍司令官  
米空軍退役空軍大将  
ラルフ・E・エバハート  
Gen. Ralph E. Eberhart (Ret.)  
JAAGA Honorary Member



Dear JAAGA Members,

Congratulations on your 20th anniversary! This is an important milestone and I know many of you have worked very hard to continue to ensure JAAGA prospers for many years to come.

I remember when the idea of JAAGA was first discussed while I was still serving in Japan. Then it was only a dream, one that seemed far over the horizon. But due to the skill, dedication, and perseverance of some of the Japanese Air Self Defense Force's finest officers, today it is not only a reality, but a vibrant organization.

What makes JAAGA so important is the relationship between JAAGA and the U. S. Air Force. This relationship permits many opportunities to get together and they are so important in keeping our relationship very close. This close relationship is absolutely required in today's security environment.

So from the United States, here's a salute to the members of JAAGA and those that have been the architects and builders of this wonderful organization.

Here's a toast to the next 20 years.  
Sincerely,

Richard B. Myers  
General, USAF, Ret.  
15th Chairman of the Joint Chiefs of Staff

Hearty congratulations and sincere appreciation to all members of JAAGA, past and present, for all you have done to promote good will between Japan and the United States and the Japanese Air Self Defense Force and the United States Air Force.

As a direct result of your contributions, our bonds grow stronger every year. I am proud to have played a small part in this evolution.

Happy 20th Anniversary to all.

Ed Eberhart  
General, USAF (Ret.)  
Former Comander,  
USFJ and 5th AF

(仮訳) 日本とアメリカ合衆国、そして航空自衛隊と米空軍の間の友好親善の促進に尽力してこられた過去及び現在のすべてのJAAGA会員に対し心からお祝いと感謝を申し上げます。あなた方の貢献の直接的な結果として我々の絆は年々より一層強固なものになりました。

私はこの進化発展にほんの僅かな役割ですが参画できたことを誇りに思います。皆さんの20周年記念を心からお祝い申し上げます。

(ラルフ・E・エバハート)

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

(仮訳) 親愛なるJAAGAの皆様、JAAGA創設20周年おめでとうございます！

これは画期的な出来事です。私はJAAGAの多くの皆さんが今日のJAAGAの繁栄を築き上げるために長年にわたり大変な努力をしてこられたことを存じています。私がまだ日本で勤務している時、JAAGA設立に向けて初めて議論が開始されたことを覚えています。当時、それはまだ夢物語であり、遥か地平線の彼方のような話でありました。

しかしながら航空自衛隊の優れた皆さんの卓越した識見と忍耐努力のお陰で現実の物となり、今日よう

な力強く活気に満ちた組織に成長しました。

JAAGAの重要性は、まさに今日のJAAGAと米空軍の関係に見ることができます。この関係は両者が集う多くの機会を創出し、我々の緊密な関係を保持する重要な役割を果たしています。この緊密な関係は、今日の安全保障環においては絶対的に必要とされています。

アメリカ合衆国から、JAAGAのメンバーとこの素晴らしい組織の創設者と継承者の皆様に敬礼を捧げるとともに、次の20年に対し祝杯を捧げます。

敬具

(リチャード・B・マイヤーズ)



**駐米大使  
佐々江 賢一郎**

**His Excellency Kenichirou Sasae  
the Japanese Ambassador  
to the U.S.**



**航空自衛隊准曹士先任  
准空尉 山崎 勝巳**  
**W.O. Katsumi Yamazaki**  
**Senior Enlisted Adviser  
of JASDF**



この度は、JAAGA 創立20周年の節目を迎えられますことを、心よりお祝い申し上げます。

外薗前会長をはじめとするJAAGA 訪米団ご一行は、毎年ワシントンD.C.を訪問され、活発に活動されております。航空自衛隊と米空軍の両幹部は長年に亘り強力な同志関係を有しており、これは日米同盟の深化を支える上でも重要な役割を果たしてきました。



**His Excellency Kenichirou Sasae(center)  
at the Residence of Gen. Eberhart**

昨今は日本が置かれている安全保障環境を背景に、日米同盟の重要性が急速に増しています。昨年は戦後70周年を迎える中、日米ガイドラインが改訂され、新たな安保法制が成立したことで、日米同盟は一層と強化されました。

このような揺るぎない日米同盟の発展を支えてきたのは、国防の現場を預かる自衛官と米軍人同士の厚い信頼関係の存在に他なりません。日本には沖縄をはじめ常に約5万5千人の米軍人が駐留し、その家族や軍属を含めると実に10万人を超える米軍関係者が日本で生活しています。日米同盟の土台となる彼らを支えるJAAGAの活動が、今後も両国の信頼関係を深め、日米同盟の更なる発展に寄与し続けることを確信しています。

在米国日本大使館においても、退役、現役を問わず、数多くの米軍将官に様々なレセプションやイベントに参加頂き、良好な関係構築を行ってきました。特に昨年春には、在日米軍経験者とその家族を含めたネットワーク強化を図るためのプログラム「JUMP (Japan U.S. Military Program)」を立ち上げ、全米各地でのイベントやレセプション、ソーシャルメディアを通じて広報活動を行い、在日米軍関係者との幅広い交流を図っています。

今年には米国にて、空自向け F-35Aを受領するほか、今後も、新空中給油輸送機 KC-46A や滞空型無人機グローバルホークなど、米空軍と共通の装備品の導入が予定されています。これまで培われてきた日米両空軍種間の人と人の固い絆が、これら新しい装備の導入と相まって、我が国の平和と安全と繁栄のための空の守りの大きな力となることを期待しています。

日米エアフォース友好協会 (JAAGA) の創立20周年、誠にありがとうございます。

こうして記念の日を迎えられたのも、会員の皆様のご努力があつてこそのことと存じ上げます。日々、歴史と実績を積み上げていること、改めて実感しております。また、准曹士隊員への激励や支援等数多くのお力添えを賜っており、全准曹士隊員を代表しまして心より御礼申し上げます。

さて、この場をお借りしてご報告させていただきたいことがあります。この度、米空軍最先任上級曹長と航空自衛隊准曹士先任による「レッド・フラッグ・アラスカ」の日米共同部隊訪問を実現する運びとなりました。在日米空軍最先任上級曹長が私のエスコートとして日本から同行し、太平洋空軍最先任上級曹長と第11空軍最先任上級曹長が現地を案内するものであります。これまでも在日米空軍と航空自衛隊の交流が盛んに行われているところではありますが、「今一步踏み込んだ交流」、「真の交流」とは何か、と悩んでいたところ、航空幕僚長をはじめ関係部署の協力、そして何よりも貴協会の御尽力があつてこそこの成果であると確信しております。ありがとうございました。「下士官の下士官による下士官のための日米共同視察」は、歴史的に見ても新たなステージへの第1歩を踏み出すものであり、世界に発信するメッセージ性も高いものと思われまふ。今後とも、日米同盟の架け橋としてのお力添えを、よろしくお願い致します。

創立20周年を一つの節目として貴協会の功績を思い、革新的な取り組みに改めて感服いたします。これからも、貴協会のさらなるご発展と会員皆様のご健勝をご祈念申し上げまして、日米エアフォース友好協会 (JAAGA) 創立20周年のお祝いの言葉とさせていただきます。



**Senior Enlisted Adviser of JASDF W.O. Katsumi Yamazaki  
together with Chief Master Sergeant of AF James A. Cody  
at Joint Base Elmendorf**



# 祝 JAAGA 創立 20 周年をお祝い申し上げます

Congratulations on JAAGA's 20th Anniversary of Foundation

## JAAGA 法人賛助会員一同

from All the Supporting Corporate Members of JAAGA

- \* (株)IHI
- \* (株)IHI エアロスペース
- \* (株)石橋オフィスサポート
- \* (株)NTT データ
- \* (株)クラレ
- \* (株)KSA インターナショナル
- \* (株)シー・キューブ  
・アイ・システムズ
- \* (株)ダイセル
- \* (株)東芝
- \* (株)日商ファインライフ
- \* (株)ハタダ
- \* (株)日立製作所ディフェンス  
・ビジネス・ユニット
- \* (株)武蔵富装
- \* (有)エイム
- \* ANA ホールディングス
- \* KYB(株)
- \* 伊藤忠商事(株)
- \* 川崎重工業(株)
- \* 新明和工業(株)
- \* 住友重機械工業(株)
- \* 住友商事(株)
- \* 住重特機サービス(株)
- \* 双信商事(株)
- \* 双日(株)
- \* 東京航空計器(株)
- \* 日本電気(株)
- \* 日本飛行機(株)
- \* 日本航空電子工業(株)
- \* ノースロップ・グラマン  
・インターナショナル・インク
- \* 測上建設工業(株)
- \* フィル・インフォメーション(株)
- \* 富士重工業(株)
- \* 富士通(株)
- \* Boeing Japan(株)
- \* 丸一土地建物(株)
- \* 丸紅エアロスペース(株)
- \* 三沢市防衛協会
- \* 三菱重工業(株)
- \* 三菱商事(株)
- \* 三菱電機(株)
- \* 三菱プレシジョン(株)
- \* 横河電機(株)
- \* ロッキード・マーチン  
・グローバル・インク

掲載順は邦文の五十音順



## JAAGA 創立 20 周年記念行事が開催 Commemorative Events of the 20th Anniversary of the Foundation of JAAGA are held on 19 July 2016

日米エアフォース友好協会 (Japan-America Air Force Goodwill Association: 以降「JAAGA」という) 創立 20 周年記念行事が平成 28 年 7 月 19 日(火)午後、グランドヒル市ヶ谷において開催され、記念講演会、感謝状贈呈式、記念祝賀会が順次挙行された。

### 【記念講演会(Commemorative Lecture)】

記念行事における最初の次第として、15 時 30 分から約 1 時間半にわたり JAAGA 会員や米軍人等約 220 名の聴講者が集まり、白樺の間において記念講演会が実施された。講師は JAAGA 設立時の在日米軍司令官兼第 5 空軍司令官であった Gen. Ralph E. Eberhart (Ret.) (元アメリカ合衆国空軍大将、JAAGA 名誉会員)で、「進化し続ける航空自衛隊と米空軍の関係」と題し、日米エアパワーの過去、現在、未来を語った。

初めに岩崎茂会長により「来日後の疲れも見せず昨日は炎天下で旧知の JAAGA 会員とグリーンミーティングを実施され、その意気軒昂さは日本で司令官として勤務された頃と全く変わらないとお見受けしました。現役時代は F-4、F-16、F-15 といった戦闘機に搭乗されるとともに米軍の重要な指揮官職につかれ、特に 9.11 の同時多発テロ時には北米航空宇宙防衛軍司令官 (USCINCSpace) として NORAD で指揮をとるとともに、合衆国本土防衛の重要性が再認識され設立された米国北方軍 (USNORTHCOM) の初代司令官として軍歴最後の職責を果たされました。今回の記念講演をご快諾いただき大変有り難く感じております」と感謝の意を込めて講師の経歴の紹介があった。

Gen. Eberhart の講演では、日米両国が独立軍種としての空軍を創り、エアマン同士の友情が育まれるまでの道程を概観し、その共通するバックボーンから見通せる日米エアパワーの役割について展望した。講演の要旨は以下の通りであった。



Guest Speaker Gen. Eberhart (Ret.), coming all the way from the U.S., is an honorary member of JAAGA and was the 5th AF Commander at the very time of JAAGA's Foundation

『19 世紀末に気球が戦場で使用されたことを端緒として、20 世紀初頭に航空機が発明され第 1 次大戦から第 2 次大戦に向けた過程で、日米軌を一にするごとく其々の陸海軍が航空機の運用レベルを高めていった。不幸にして先の大戦において日米のエアパワーは太平洋において激突したが、その戦闘を通じて双方に相手側の技量と能力に対する尊敬と敬意の念が生じる契機ともなった。

戦後、1947 年 9 月に米国国家安全保障法により USAF が生まれ、1954 年 7 月に自衛隊法により空自が設立された。組織としての類似性が高い日米両国の空軍は、訓練・演習を通じ SQ から軍に至る様々なレベルで連携が図られ、共通の装備品 (F-86、F-104、F-4、F-15 等) の能力を最大限に発揮しようとする努力の中で密接な関係を深化させていった。空軍として有する共通の「価値観」「利益」「姿勢」と共に、共通のテーマ(「課題」「脅威」「懸念)を有することとなったのも、直面する厳しい国際環境があったためと言えよう。

高圧的にミサイル発射や核実験を繰り返す北朝鮮。南シナ海や、東シナ海で覇権的行動により航行の自由を



Scene of lecture on “Ever Evolving JASDF and USAF Relationship”





During some 40 minutes Q&A session, JAAGA members and USAF members ask varieties of questions one after another, and Gen. Eberhart answered to each of them in persuasive manner with his rich experiences



Some people are active, behind the scenes, for simultaneous interpretation, taking notes and photos

阻害する中国。ロシアの潜在的な脅威も近年次第に先鋭化し始めた。北東アジアにおいて、空自とともに USAF が平和と安定に寄与し、日米両国の良好な関係を育む一翼となれたことに誇りを感じず。しかし、将来に向けて問題は山積しており、北朝鮮、中国、ロシアの近年における行動に対しやや遅れを取ってしまった。

その対処すべき中でも、ミサイル防衛は極めて重要であり、指揮統制、情報共有、サイバー対処において更なるステップアップを図らなければならない。このような共通の課題を乗り越えて行くにあたって、良好な日米関係は何にも増して重要であり、空自と USAF の連携がその中核となるに違いない。退役してからも、日本での勤務をなつかしく想い出し、日米エアマン間の信頼と友情をこれからも大切にしていきたい。難局を乗り切る努力を続ける日米エアフォースのメンバーに、JAAGA の活動と連携しつつ支援のエールを送っていく所存だ』

前段の講演の後の質疑応答では、計 10 名の正会員及び賛助会員からなされた様々な視点からの質問に対し、Gen. Eberhart は丁寧かつ真摯に、これまでの経験に裏打ちされた見識をもって答えていった。主な質疑応答の要点を、ここに紹介する。

**Q-1** フィリピンからの撤収は今から考えると急激過ぎたのではないかと。現在の中国による南シナ海での覇権的活動の原因を作ってしまったのではないかと。

**A-1** 当時は冷戦終結後の平和の配当、軍事費削減の圧力が高まっていた。直接の撤収理由はピナツボ火山の噴火であったが、短視眼的な撤収で米国のアジア・プレゼンスに悪影響を与えてしまった。戦略的判断において反省すべき点のある事例であった。

**Q-2** 指揮官の判断と決心について、9. 11の経験を踏まえ、所見を伺いたい。

**A-2** 状況不明の中で生死を分ける判断と決心を迅速に行うことほど難しいことは無い。十分な状況把握に基づく合理的な判断が大切だが、自らの経験則から直観的に合理的判断において見過ごしてしまった重要事項に気付くこともある。しかし、時代の変化は激しく、経験に固執してしまう危険性にも注意を要する。前線のエキスパートの話にも耳を傾ける姿勢が適格な意思決定において非常に重要だ。

**Q-3** 共和党大会も始まったが、次期大統領が日米安全保障体制の重要性を認めない場合、日米関係はどうなるのか？

**A-3** 選挙時の大統領候補の発言を額面通り受けとめる必要はない。大統領に就任すると同時に現実にとらわれ、国務省・国防総省等からの報告で真実を知ることとなる。レーガン大統領も選挙中はソ連を敵対視した発言をしたが、大統領就任以降、現実を見つめ冷戦を終結させた。日米同盟が如何に重要であるか次期大統領も就任直



後に認識するはずだ。

**Q-4** 日米同盟の重要性を大部分の日本国民は理解しているが、米国市民にとって日本は米国が条約を結ぶ24か国の1国に過ぎない。一般の米国市民にその重要性を理解してもらう方策はないか？

**A-4** 地図を見れば日米同盟の重要性はすぐ分かる。残念ながら平均的な米国市民は地図も見ない人達が多い。だから、日米関係のみならず彼等はNATOのことも全く知らない。まず、日本で仕事をした経験を有する知日派から、日米同盟の重要性を情報発信し拡大していくことだ。米国内の様々な組織やクラブで日本の重要性を伝え語っていく過程の中で、日本に対する真の理解が進んでいくはずだ。

**Q-5** 日本国内の米軍基地と基地周辺コミュニティの良好な関係構築の方策について伺いたい(多摩ヒルズにおいて10年前から周辺コミュニティの少年少女にゴルフを知る機会を提供し、その多摩キッズに属する少女が世界少年少女ゴルフ大会で優勝したことや、嘉手納基地で行われるスペシャルオリンピックス(地域と基地が協力し実施する障害者参加の運動競技会)が世界中の米軍施設において最大規模となった事等も複数の質問者より紹介された)。

**A-5** ご紹介いただいた基地周辺の方々との心温まる交流に敬意を表したい。基地問題において地域住民との相互理解が最も重要だ。基地の存在を受け入れてくれることに感謝し地域に貢献する。地域住民の有する価値観を理解し共に歩む姿勢が究極の方策だろう。

活発な質疑応答の中で、聴講者の多くが日米同盟の今後について高い関心を有していることが伺えた。最後に会長から講師 Gen. Eberhart に対して謝辞とともに記念品が手渡された際には、聴講者全員が起立し惜しめない拍手が送られ記念講演は終了した。

### 【感謝状贈呈式(Presentation Ceremony)】

講演会に続き、17時15分から18時までの間、白樺の間においてJAAGAの各種活動とその発展に貢献した日米双方の関係者及び団体に対する感謝状贈呈式が行われた。

まず、米空軍側の横田基地第5空軍司令部広報部、嘉手納基地第18航空団司令部広報部、三沢基地第35戦闘航空団司令部広報部、横田基地第374空輸航空団司令部広報部の代表者に対し、順次JAAGAの活動への協力支援に対する感謝状と記念品が贈呈された。

引き続き、日本側の法人賛助会員である11法人(KYB株式会社、新明和工業株式会社、株式会社ダイセル、東京航空計器株式会社、株式会社東芝、日本航空電子工業株式会社、日本飛行機株式会社、株式会



President Iwasaki presents a memento to Gen. Eberhart with a firm handshake

社日立製作所ディフェンスビジネスユニット、富士重工業株式会社、三菱プレジジョン株式会社、横河電機株式会社)に対して、これまでのJAAGAの活動趣旨への理解と協力に関し感謝状と記念品が順次贈呈された。

岩崎会長からは、「平成8年のJAAGA設立から10年目の第1回、15年目の節目として実施した第2回の各感謝状贈呈に引き続き、今回JAAGA創立20周年を祝い感謝状を贈呈させていただきます。JAAGAの設立目的である航空自衛隊と米空軍との相互理解及び友好親善の増進に寄与する事業を推進し、日米両国の信頼関係の向上に貢献する活動に御支援をいただいた事に謝意を表します。北東アジアの情勢が不透明かつ不確実な中、日米両国の信頼関係を深める事が増々必要であり、航空自衛隊と米空軍の信頼を一層揺るぎないものにしていくことは極めて重要です。今後ともJAAGAの組織目的を御理解いただき、引き続き御協力をお願い致します」との挨拶がなされた。



President Iwasaki explains the value of the Presentation Ceremony of Letter of Appreciation



JAAGA expresses deep appreciations to four Public Affairs Departments of USAF, Japan, and 11 Supporting Corporate Members of JAAGA



Public Affairs,  
5thAF, Yokota AB



Public Affairs,  
18th Wing, Kadena AB



Public Affairs,  
35th Fighter Wing, Misawa AB



Public Affairs,  
374th Airlift Wing, Yokota AB



KYB Corporation



ShinMaywa Industries, Ltd.



DAICEL CORPORATION



TOKYO AIRCRAFT INSTRUMENT  
CO.,LTD.



TOSHIBA CORPORATION



Japan Aviation Electronics Industry,  
Ltd.



NIPPI Corporation



Hitachi, Ltd. Defence Business Unit



FUJI HEAVY INDUSTRIES Ltd.



MITSUBISHI PRECISION CO.,LTD.



Yokogawa Electric Corporation



## 【オープニング ウェルカムドリンク (Opening of Reception Hall)】

18時から18時30分までの間、祝賀会場の瑠璃の間に順次、出席者が参集しウェルカムドリンクの懇談の輪が会場各所につくられた。航空中央音楽隊から10名の支援を受け、ピアノ、サクソ、ドラム等6名編成のコンボ・バンド(小編成ジャズバンド)がバンドマスター新井隆弘空曹長リードのもとに、軽快なリズムを響かせた。エアフォース・マーチをアレンジしたジャズのビートが会場全体を心地良い波動で包んだ。

会場左側の壁面には、これまでの「JAAGAだよりダイジェスト」の映像がスライドショーとして映し出され創刊号に掲載された1996年(平成8年)7月5日の設立総会における大村平初代会長の挨拶や、その1ヶ月前に着任したばかりのLt. Gen. Eberhart 第5空軍司令官の祝辞や講演時の写真に、設立から現在に至る20年の歳月が想起された。

## 【記念祝賀会(Reception)】

記念祝賀会は18時30分から約2時間にわたり、約300名の関係者が参集し開催された。

会場には、防衛大臣中谷元衆議院議員、元防衛副大臣武田良太衆議院議員、中谷真一衆議院議員、元駐米大使藤崎一郎日米協会会長、航空幕僚長杉山良行空将、航空幕僚副長丸茂吉成空将、情報本部長宮川正空将、幹部学校長小野賀三空将、航空開発実験集団司令官荒木文博空将、中部航空方面隊司令官三谷直人空将及び航空幕僚監部をはじめとした航空自衛隊の各部隊等の関係者、米空軍からはゲストスピーカーのGen. Eberhart (Ret.) 名誉会員夫妻、在日米軍司令官兼第5空軍司令官Lt. Gen John L. Dolan



Icebreaker with Jazz Beat by JASDF Central Band and Slide Show of 20-Year Digest of JAAGA-Dayori

夫妻、第5空軍副司令官 Brig. Gen. Michael P. Winkler 夫妻、第18航空団司令 Brig. Gen. Barry R. Cornish 及び横田基地関係者、関係団体等からは杉本正彦日米ネービー友好協会(JANAFNA)会長、吉田正つばさ会会長等、そして富田勝也福生・横田交流クラブ副会長、石塚幸右衛門瑞穂町長等多くの来賓の出席を得て、盛大な祝賀会となった。

開催にあたり、航空中央音楽隊による日米両国の国歌吹奏に続き、岩崎会長から「JAAGAが設立された1996年(平成8年)当時は、冷戦終結の影響を受け日米安保体制の意義を見直そうとする動きもあり、沖縄で



President Iwasaki gives an opening remarks, which contains history of JAAGA, appreciation and ambition, to the some 300 participants of JAPAN-U.S. Alliance





Gen. Akio Suzuki (Ret.), the second President of JAAGA, explains brief history of JAAGA and emphasizes the root and important spirit, “Goodwill”

He invites everyone to proposing a toast to “GOODWILL”



の不幸な事件も起きて日米関係は難しい問題をかかえていました。その様な状況にあつて、本国を離れ日本で勤務する米空軍軍人及びその家族に、感謝の意を伝え、その日本駐留が真に意義あるものであることを実感してもらうために JAAGA が設立されたと同っております。この 20 年を振り返れば、様々な局面で日米双方の諸先輩が、空自と米空軍間における信頼と友好の醸成に尽力してこられました。記念講演の中で Gen. Eberhart も日米エアマンの間に生まれた尊敬と敬意についてお話になりました。この日米エアパワーの関係者が共有する想いを大切にしつつ、日米双方の現役諸官が緊密な連携をはかれるよう、此処に集われた皆様とともに JAAGA の活動を進めて参ります」と挨拶がなされた。

来賓祝辞として中谷防衛大臣からは「20 年間にわたる JAAGA の歴史は、まさに新たな時代の変化の中で日米同盟を緊密かつ強固なものとする取組とともに創られてきたと理解しております。2010 年(平成 22 年)にワシントンにおいて在日米軍経験者同窓会 (US Military Japan Alumni Association) が設立され、その際、本日のゲストスピーカー Gen. Eberhart や Gen. Myers 等、日米同盟に関係を持たれた米国の退役将官と宴席をともにさせていただきました。自衛官と米軍人の尽力により日米同盟が強化されてきたことを実感した次第です」とエピソードが語られ、JAAGA の発展が祈念された。

杉山空幕長からは軽妙なウィットに富む英語での祝辞がなされ会場全体の空気が和む中、総隊司令部が横田に移転してからの 4 年間に於いて、各種の活動における空自と米空軍の緊密な連携のレベルが飛躍的に高まっていることが紹介された。米空軍を代表して Lt. Gen Dolan 司令官は「杉山空幕長の話された通り、日米のエアパワーの緊密な連携が各種場面で発揮されていることを実感している。本日は米空軍の若いメンバーも参加しているが、彼等が 20 年後の 40 周年記念行事

において 20 年前の思い出を懐かしく語ることが出来る様に、日米空軍間の信頼と友好の関係を深めていきたい」と語った。

来賓のトリとして、JAAGA の歩んだ 20 年の歳月に想いを馳せつつ鈴木昭雄第 2 代会長より「日米同盟に大輪の華を咲かせよう。日米相互の“GOODWILL”に乾杯！」との発声がなされ祝賀会懇親の宴となった。

今回は JAAGA の 20 年の道程を期する結節の宴であり、日米相互に関心の深い話題で出席者の話題は尽きないようであった。来賓各位も日米の関係者と親しく懇談し、また旧知の日米関係者の間では思い出話に花が咲くなど、終始和やかな雰囲気と活気に満ちた会話が会場を包んでいた。

20 時 30 分、森下一副会長より「設立時以降 JAAGA の活動に尽力されてきた諸先輩」「厳しい国際環境の中で任務につく日米現役諸官」「JAAGA の活動に理解と協力をいただいている会員等」各位の健勝を祈念して乾杯がなされ祝賀会は締めくくられた。会場出口において岩崎会長夫妻が祝賀会参集者を送りつつ、一人一人に感謝の意が伝えられるとともに、各参集者に日米エアフォース友好の想いを文字と映像で綴った「JAAGA 創立 20 周年記念 DVD」が贈られ、創立 20 周年記念行事は幕を閉じた。

(広報担当理事記)

### \*「JAAGA 創立 20 周年記念 DVD」

「会長挨拶」「祝辞」「記念寄稿」「歴代役員等資料」「機関誌 JAAGA だより(第 1～49 号)」「JAAGA 20 年の歩み(クロノロジー)」「だよりダイジェスト(スライドショー)」の項目を編集し、JAAGA 20 年の歩みが文字と映像で記録してあります。

なお、本 DVD 掲載の主な内容は、JAAGA ホームページ(<http://www.jaaga.jp/index.htm>)からもご覧になれます。







JAAGA, Japan-America Air Force Goodwill Association, has grown since 1996









## 平成 28 年度 JAAGA 総会開催 JAAGA Annual Convention held on 16 May 2016

平成 28 年度 JAAGA 総会が 5 月 16 日(月)、グランドヒル市ヶ谷において、講演会とともに開催された(懇親会は、7 月 19 日(火)に 20 周年記念行事を予定していることから、今回の総会では実施しなかった)。

### 【総会(General Meeting)】

年次総会が 13 時から 1 時間余にわたり開催され、正会員総数 257 名の内、出席者 69 名、委任状提出者 154 名により、会則の規定により総会は成立し、審議等が進められた。審議に先立ち、本年 4 月にご逝去された故上田完二氏(当時 JAAGA 副会長)の御冥福を祈り参集者全員で黙祷を捧げた。

その後、総会の進行は会長挨拶、議案審議、新会長、副会長及び監事の選任、新顧問等の委嘱、退任者の紹介等の順で整齊と実施された。

外菌健一朗会長からは「JAAGA の活動はますます充実してきており、歴代太平洋空軍司令官 4 名の JAAGA 名誉会員委嘱、新会員の増加や JAAGA だより発行・表彰行事の効率化努力等による財務状況の好転、7 月開催予定の 20 周年記念行事の各種準備等にその活動の成果が現れている。空自と米空軍との相互理解及び友好親善を推進し、日米両国の信頼関係の向上に貢献する」とした設立目的に十分合致した活動がなされている。平成 28 年度総会においても前年度の総括を行い、今年度の事業及び予算等について鋭意御



General meeting is proceeding

審議願いたい」との挨拶があった。

続いて、議案審議に移り、平成 27 年度事業報告、同決算報告及び監査報告並びに平成 28 年度事業計画及び同予算に関する各々の議案について担当理事から説明があり、いずれも提案通り承認された。その過程で JAAGA の活動に係る各種の案件について意見が交わされた。最終議案として、会長、副会長、監事の選任が行われ、引き続き会長、副会長、監事、顧問、新任理事等の新年度の役員が紹介された。岩崎茂新会長より「JAAGA 創立 20 周年を迎える時期に歴代会長の御功績を引き継ぎ、日米同盟の信頼感を醸成する」とした設立趣旨に合致したあるべき姿を追い求めつつ JAAGA の活動のさらなる発展に寄与したい」との挨拶がなされた。

最後に、岩崎新会長から JAAGA への貢献に対する感謝の気持ちを込めた外菌前会長の紹介がなされた。さらに退任する副会長、監事、理事の紹介及び顧問委嘱が行われ参集する全会員から暖かい拍手が送られた。

(杉山(伸)理事記)



President Hokazono presides over the meeting



Deliberation of Agenda among Regular Members







(←) Introducing outgoing officers with satisfaction  
 (↑) President, from Mr. Hokazono to Mr. Iwasaki  
 (→) Introducing incoming officers with hope

平成28年度事業予定表

項目	実施時期	1/四半期			2/四半期			3/四半期			4/四半期		
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1 日米隊員の 激励等	(1) 日米共同訓練参加隊員の激励等 (2) 日米隊員の表彰 (3) 日米隊員の交流活動等激励	—————			—————			—————			—————		
2 米空軍軍人の 日本研修等支援	(1) 米空軍軍人の日本文化研修支援 (2) 米空軍軍人の地域行事等支援			○	横田	○	三沢		○	嘉手納			
3 JAAGAと 空自・米空軍 との交流	(1) SPORTEX' 16 (2) 指揮官交代行事等への出席等 (3) 米空軍協会総会への参加 (4) 在日米空軍各基地との連携の強化 (5) 米空軍慶弔への対応 (6) 関係団体との交流	○									○	○	○
4 広報及び 広報協力	(1) 日米要人等の講演 (2) 米軍基地等の研修 (3) 日米安保等に関する広報活動 (4) 会報「だより」の発行・配布 (5) 一般広報(HPの運営等)		○		横田	○					三沢		
5 総会等	(1) 総会 (2) 創立20周年記念行事		○	5/16		○	7/19						
6 運営管理	(1) 会勢の拡大等 ・会員の拡充 ・支部の活性化等 (2) 組織基盤の整備等 (3) 会員名簿の作成・配布 (4) 役員会(★)・理事会(☆) (5) 監査	←—————	←—————	←—————	←—————	←—————	←—————	←—————	←—————	←—————	←—————	←—————	←—————
		★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★
		○											

凡例: ←→ 年間を通じて実施 ——— 実施時期未定

【講演会(Lecture)】

1 空幕装備計画部長の講演概要

講演会は、14時30分から約1時間半にわたり、航空幕僚監部装備計画部長井上浩秀空将補を講師として開催された。今回は「空自後方の将来について」と題して、南西域をはじめ日本を取り巻く各種安全保障環境の変化を捉えつつ、多種多様な装備品を適時に運用に供し得る俊敏性を有した後方について、その現状と将来が語られた。

井上将補は、モザンビークPKO 派遣をはじめ、外務省国際情報局勤務、米国統連合幕僚課程履修、中国防衛駐在官勤務といった海外関連の勤務経験を有しており、空自後方の将来について国際的視野からの



Guest Speaker,  
Maj. Gen. Hirohide Inoue under giving a lecture





Scene of lecture on  
“The Future of Logistics of JASDF”



考えが表明された。

講師は幹候 75 期(防大 29 期相当)学習院大学法学部出身で職種は航空機整備であり、空幕装備課長、幹部候補生学校長、3 空団司令を歴任、27 年 12 月より現職にある。講演は、その全体像を聴講者がイメージアップ出来るように、以下 6 項目に整理弁別し、具体的なデータ等を提示しつつ進められた。

<空自後方の将来について>

- 1 空自後方概観
- 2 空自後方が目指す方向性
- 3 空自後方の取り組み
- (1) 後方支援態勢の見直しに係る検討
- (2) 新機種導入に向けた後方支援態勢整備
- 4 防衛装備行政に係る検討状況
- 5 日米後方関係者の交流
- 6 後方を担うリーダーの育成

冒頭、熊本地震に迅速に対応した空自の災害派遣活動状況を写真で紹介し、後方活動が陥りやすい鈍重性を克服し、如何に俊敏性を確保するかが最も重要な後方の課題だと語り、近年、更に大きく変化した安全保障環境や新たに取組が始まった各種後方関連施策等の具体的内容を丁寧に説明し、各項目に自らの所見を交え後方の現況と進むべき将来が語られた。

(講演内容の細部は、JAAGA ホームページ <http://www.jaaga.jp/> をご参照ください。)

## 2 質問及び会長の言葉

後方の現状と課題に係る広範かつ詳細な説明を含む講演であったため、質問時間に充て得る時間も僅かとなったが、聴講者から「後方・研究開発の組織」に係る質問がなされた。現下の変化の激しい状況における空自の後方と研究開発に係る問題認識を込めた質問内容であったが、講師からもそれらの課題に対する努力すべき方向性が語られた。

最後に、岩崎会長から、「空自後方の現状と課題に

係る丁寧かつ具体的な説明」に対する謝辞と共に、「各種の制約がある中で、任重き課題が増えていく」空自の現状と将来に言及しつつ、空自の後方部門を支える中核として空幕装備計画部長の職にある講師を労い自愛を祈念する旨、閉めの挨拶がなされ講演会を終了した。

(杉山(伸)理事記)



President Iwasaki presents a memento to  
Maj. Gen. Inoue



## グアムにおける日米豪共同訓練参加隊員を激励 JAAGA cheers JASDF participants to Cope North Guam 2016

1月14日(木)に、森下理事長、中島理事及び早坂理事が13時10分から航空支援集団司令官小城真一空将を、15時30分から航空総隊司令官福江広明空将をそれぞれ訪問し、グアムにおける日米豪共同訓練及び日米豪人道支援・災害救援共同訓練に参加する航空総隊及び航空支援集団の参加隊員を激励(JAAGAからの激励品を手交)し、訓練の成功を祈念した。両司令官からは「JAAGAからの激励に参加隊員を代表し心から感謝申し上げます。激励の趣旨を参加指揮官に伝えるとともに、実りある訓練となるよう参加隊員一同大いに励むよう努めてまいります」と感謝の意が表された。

(早坂理事記)

本訓練は、『日米豪軍共同訓練による日米共同対処能力及び部隊の戦術技量の向上並びに人道支援・災害救援活動に係る米豪軍との相互運用性の向上』を目的とし、1月26日(火)～3月8日(火)(展開、撤収を含む)、米国グアム島アンダーセン空軍基地、北マリアナ諸島サイパン島、テナアン島、ロタ島及びファラロン・デ・メディニラ空対地射場並びに同周辺空域において実施された。

グアムにおける日米豪共同訓練には、2月10日(水)～2月26日(金)、航空総隊から第6航空団(小松)、第3航空団(三沢)、航空救難団(入間)及び警戒航空隊(三沢)の人員370名、F-15J/DJ×8機、F-2A×6機、U-125A×2機、E-2C×2機が、航空支援集団か



JAAGA Chairman Morishita, Director Nakashima and Hayasaka call on Lt. Gen. Fukue, Commander of Air Defense Command in Yokota AB (↑) and Lt. Gen. Kojoh, Commander of Air Support Command in Fuchu AB (↓) to encourage their participants to CNG on 14 Jan. 2016



ら第1輸送航空隊(小牧)の人員100名(日米豪人道支援・災害救援共同訓練に参加した70名を含む。)、C-130H×2機、KC-767×2機(日米豪人道支援・災害救援共同訓練に参加したC-130H×2機を含む。)が参加し、防空戦闘、えん護戦闘、戦闘機戦闘、空対地射



Cope North GUAM 16 at Andersen Air Force Base in Guam

10～26 Feb. 2016

All the participating members & aircrafts are assembled on apron area



爆撃、電子戦、空中給油、戦術空輸及び捜索の各訓練を実施した。

日米豪人道支援・災害救援共同訓練には、2月10日(水)～2月18日(木)、航空支援集団の第1輸送航空隊(小牧)及び航空機動衛生隊(小牧)から人員70名、C-130H×2機が参加して、航空輸送、物料投下、

不整地離着陸、捜索及び航空患者搬送の訓練並びに机上演習(Table Top Exercise)が実施された。

なお、グアムより、航空総隊の訓練実施部隊指揮官渡部琢也1等空佐から現地での訓練の近況とJAAGAの激励品に対するお礼状が届いたことをここにお知らせする。  
(早坂、山本理事記)



## Cope North Guam 2016

Scenes in Guam during exercise







Col. Takuya Watanabe calls on Brig. Gen. Andrew J. Toth, Commander of 36th Wing (↑) and Col. Sam White, Commander of Ops. Group(↓)



Smiling JASDF participants appreciate goods of encouragement





## RFA 参加隊員を激励 JAAGA cheers JASDF participants to RED FLAG-Alaska

5月11日(水)午後、森下理事長、中島、杉山(伸)理事が、横田基地に航空総隊司令官福江広明空将を、府中基地に航空支援集団司令官小城真一空将を、それぞれ訪れ、米空軍の実施する演習(レッド・フラッグ・アラスカ)に参加する航空総隊及び航空支援集団の隊員に対するJAAGAからの激励品目録を手交し、訓練の成功を祈念した。

両司令官からは、「JAAGAからのご支援に感謝します。全隊員に紹介し、訓練の成功に役立てさせて顶きます」との感謝の意が表せられた。また、懇談の中では、「本訓練を通じてさらなるステップ・アップを図っていく。JAAGAからの激励品及びメッセージを部隊指揮官に渡し、激励支援の想いを伝えたい」等の訓練に臨む両司令官の想いが随所に感じ取れた。

今年度の訓練は、5月24日(火)から6月24日(金)(レッド・フラッグ・アラスカ演習期間は6月3日(金)から6月18日(土))の間行われ、人員約310名、F-15×6機、E-767×1機、C-130H×3機、KC-767×2機が、米国アラスカ州アイルソン空軍基地及びエレンドルフ・リチャードソン統合基地並びに同周辺空域等において実施された同演習に参加し、防空戦闘訓練、空中給油訓練及び戦術空輸訓練を実施して、部隊の戦術技量及び日米共同対処能力の向上を図った。なお、F-15が本邦、アラスカ間を渡洋する際には、米空軍空中給油機及び空自KC-767による空中給油を受けた。

(杉山理事記)



JAAGA Chairman Morishita, Director Nakashima and Sugiyama call on Lt. Gen. Fukue, Commander of Air Defense Command in Yokota AB on 11 May 2016



JAAGA officers call on Lt. Gen. Kojo, Commander of Air Support Command, and his vice and staff in Fuchu AB on 11 May 2016



Topic

～日米下士官交流の進展～

### 航空自衛隊准曹士先任と米空軍最先任上級曹長の共同部隊視察 Promoting of JASDF-USAF Top Senior NCO Exchange Program

空自准曹士先任山崎勝巳准空尉からご提供を頂いた、航空自衛隊の准曹士と米空軍の下士官との交流の進展の一例をここに紹介する。

平成28年6月のRed Flag Alaskaにおいて、航空自衛隊准曹士先任山崎勝巳准空尉が、米空軍最先任上級曹長CMSAF James A. Codyの招待を受け、日米共同部隊視察を実施した。日米下士官交流の発展を象徴する好事例である。

本プログラムは航空自衛隊准曹士先任が海外訓練における准曹士隊員の活動状況を身をもって理解することができると同時に、日米下士官同士の強固な絆を

内外に示すものとなった。空自派遣部隊准曹士隊員の現地における服務規律や士気の維持について、派遣部隊の准曹士先任から着眼及び指導方法の説明を実地に受け、また、米空軍最先任上級曹長との対談を通じ、日米相互の人材育成に関する相互理解の促進について、今後も双方が継続的に連携し合うことの重要性を認識する機会となった。

(山崎空自准曹士先任談 聴取・文責：JAAGA 広報)






SEA Yamazaki(right)  
talks with CMSAF Cody(left)  
SSgt Jason Sugimoto(center, interpreter)



**Training Scenes of RFA**



  
 Office of the Chief Master Sergeant of the Air Force  
 1078 Air Force Management  
 Washington, DC 20330-1520

13 Apr 2016


Dear WO Yamazaki,

I am pleased to invite you to attend the RED FRAG-Alaska training exercise with me on 13 June 2016 at Joint Base Elmendorf-Richardson. RED FRAG is an important field training exercise for joint offensive counter-air, interdiction, close air support and large force employment training in a simulated combat environment. Our Airmen will hone their warfighting skills and more importantly, test their interoperability with nation partners.

I look forward to hearing the training area with you and observing the close working relationship between your Japan Air Self-Defense Forces and US Air Forces. I was very impressed during my visit to Japan last year to learn of your focus on developing the enlisted force and creating opportunities for partnerships at Kadena, Misawa and Yokota Air Bases. Our alliance is strong and grows even stronger when our forces interact in the classroom and field training exercises.

Again, it would be an honor if you can accompany me to Joint Base Elmendorf-Richardson. My Fifth Air Force command chief, CMSgt Terence "Terry" Greene will assist you with trip arrangements. Please contact him with any questions or comments and please let me know soonest if you will be able to attend.

Very respectfully

  
 JAMES A. CODY, USAF  
 Chief Master Sergeant of the Air Force

**Invitation to Red Frag Alaska**  
from CMSAF to SEA of JASDF

  
 Air Staff Office  
 Japan Air Self-Defense Force  
 3-1, 2-20000, 2-20000, 2-20000, 2-20000, 2-20000

11 May 2016

CMSgt James A. Cody  
Chief Master Sergeant of the Air Force

Dear Chief Cody,

Please accept my sincere gratitude for the invitation to the RED FRAG-Alaska training exercise. I am delighted to participate in this exercise with you.

As you know, this is the very first opportunity for JASDF's NCO to participate in this observer program, and I am convinced that this tour will lead JASDF Enlisted Forces to the golden future.

I understand that enhancing mutual cooperation and trust among leaders of senior NCO is important to strengthen the USAF-JASDF Alliance. We will discuss many issues through visiting the training field. Exchanging opinions among leaders of NCO is not only meaningful to develop our relationship and friendship, but also beneficial to nourish my leadership skills. I feel as if I am opening a new page of our history.

Again, I appreciate your generous invitation. I will be accompanied by Chief Master Sergeant Takashi MAKI, my assistant, for this visit. I am looking forward to seeing you in Alaska and I wish you and USAF further success and prosperity.

Sincerely Yours,

  
 Katsumi Yamazaki  
 Warrant Officer, JASDF  
 Senior Enlisted Advisor

**Appreciation reply**  
from SEA of JASDF to CMSAF





## 日米相互特技訓練を支援 Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program

5月10日(水)、JAAGAは、平成28年度日米相互特技訓練を激励するため森下理事長、中島、杉山、福永の各理事が空幕人事教育部長 城殿保空将補を表敬訪問した。

日米相互特技訓練は、平成8年2月に三沢基地において相互部隊研修として、空自から幹部3名、空曹7名が参加して、各特技と英語能力の練成を研修内容として第1回目が実施された。以来、20年以上にわたり、成果を確認しながら検討した結果、日米共同作戦の基盤となる現場レベルにおける特技訓練に重点を置く観点から、平成26年度に名称を「日米相互特技訓練」に変更し、平成27年度に事業化された。

表敬においては、森下理事長から城殿部長へ激励品目録を贈呈の後、教育課長寺崎隆行1等空佐、空自准曹士先任山崎勝巳准空尉が加わり写真撮影が行われた。その後、本訓練を担当する教育課個人訓練班上治忠善准空尉が加わり、30分程度の懇談が行われ、平成28年度日米相互特技訓練を激励した。

懇談の中で、城殿部長から、「昨年度は、10名×10日間の訓練規模×期間で、5回の各特技における実務レベルの訓練を実施して英語によるコミュニケーションスキルを向上させるとともに、実務レベルにおける相互理解を深めることができた。また、米軍下士官の受け入れにより、日頃、米軍との接点が少ない部隊等にとっても良い経験を積むことができた。本訓練は、日米の信頼関係、日米共同対処能力の基盤を強化するうえでとても有効であり、JAAGAの支援には大変感謝している。」と謝意が示された。また、森下理事長は、「これまで、今回の日米相互特技訓練をはじめ、レッド・フラッグ・アラスカやコープノース・グアム参加隊員の激励、日米隊員の表彰など、実務に携わる日米隊員の激励を行ってきたことが定着してきている。JAAGAの活動を知る日米の関係者がその活動を認めてくれていて親密な関係の深化に貢献していると感じている。これからも日米連携の強化につながる実務レベルの交流を微力ながら側面から支援していければと思う。」と激励した。

平成28年度は、昨年度に引き続き、F-35関連の要員を含めた訓練規模の拡大(差出人員の増加)、訓練効果を更に高めるための導入教育の充実、運用、整備特技に限らない多様な特技の参加者選考及び航空基地だけでなく分屯基地(平成28年度は新潟及び海栗島)も含めた空自の多様な環境下における訓練の実施を重視し、計画されるとのことであった。

(福永理事記)



JAAGA Chairman Morishita, Director Nakashima and Fukunaga call on Maj. Gen. Kidono, Director, Personnel and Education Dep., Col. Terasaki, Head, Education Div. and W.O. Yamazaki, SEA of JASDF, at ASO on 10 May 2016 to support NCOEP

	受入基地 (Base)	期間 (Period)	人員 (Number)
米空軍から空自へ (To JASDF)	那覇(NAHA)	Sep.09 - 16, 2015	10
	佐渡(SADO)	Nov.30 - Dec.04, 2015	5
空自から米空軍へ (To USAF)	三沢(MISAWA)	Sep.25 - Oct.9, 2015	9
	嘉手納(KADENA)	Dec.8 - 17, 2015	12
	三沢(MISAWA)	Mar.1 - 10, 2016	11
	横田(YOKOTA)	Mar.15 - 24, 2016	16
	嘉手納(KADENA)	Mar.22 - 31, 2016	9

### Result of NCOEP in FY2015

	受入基地 (Base)	期間 (Period)	人員 (Number)
米空軍から空自へ (To JASDF)	新潟(NIIGATA)	検討中(TBD)	5
	岐阜(GIFU)	May 17 - 26, 2016	10
	海栗島(UNISHIMA)	Jan.-Mar. 2017 (TBD)	5
	千歳(CHITOSE)	Mar.2017 調整中(TBD)	10
空自から米空軍へ (To USAF)	三沢(MISAWA)	調整中(TBD)	20
	横田(YOKOTA)	調整中(TBD)	20
	嘉手納(KADENA)	調整中(TBD)	20

### Plan of NCOEP in FY2016



第 46 警戒隊(佐渡分屯基地)《Sado》

第 46 警戒隊准曹士先任治田敏雄准空尉の佐渡分屯基地における日米相互特技訓練の実施状況についての所感をここに紹介する。

「平成 27 年度日米相互特技訓練(佐渡分屯基地)における在日米空軍下士官の受入れ」につきましては、日米エアフォース友好協会会員皆様方の格別なご支援を賜り大成功を収めることが出来たことを深く感謝いたしますとともに厚く御礼を申し上げます。

今年度から、警戒群(隊)が参加する日米相互特技訓練において、佐渡分屯基地が第 1 回目となる受入れを実施するにあたり、第 46 警戒隊長の要望事項である「組織力の発揮」を念頭に、全隊員「一致団結」により万全の態勢で米空軍下士官を迎え入れました。

11 月 30 日から 12 月 3 日の移動日を含めて 4 日間と短い受け入れ期間ではありましたが、警戒隊における勤務及び生活状況並びに特技訓練を通じて、相互理解を深めるとともに、日米双方で、訓練者及び受入れ隊員等がそれぞれに特技能力の向上を図りました。



Courtesy Call on Lt. Col. Ohashi, Commander of 46th AWS and Sado Sub Base



Training in each specialty



General mass briefing to introduce Sado and Yokota each other



Good job! Great achievements of calligraphy



Driving in a snow vehicle on compacted snow path





特に、日米間におけるコミュニケーションの深化を図るため、全隊員にとって英語能力の必要性及び能力向上に向けた動機付けとなり得るなど、その成果は大となりました。

また、下士官5名には特技訓練以外にも、佐渡の郷土芸能及び日本の文化を体験させることにより、日本の良き伝統や風習等も学ばせることが出来ました。

訓練開始前には、我が方の任務及び組織の説明等を実施するとともに、横田基地の概要説明も受け、相互の理解を図り特技訓練に臨みました。

特技訓練の実施に関しては、各受入れ単位ごと、特に安全面に留意した計画を作成させるとともに、より理解しやすいように写真及び図を使用しての説明資料を作成後に訓練支援を実施し、特技訓練終了後には意見交換会により、「システムが類似しているので、装備品も日米の互換性を持った方が良い」「横田基地との交流を深めて頻繁に機会を作ってほしい」等の活発な意見が米空軍下士官から出ました。他方、支援要員からも、機会があれば横田基地に行き、特技訓練等を実施したいと言う声があがりました。

英会話については、当初は苦手意識を持つ隊員が多く、初日は身振り手振りだけで説明する隊員が多く見られましたが、最終日までには雰囲気にも慣れたのか、ゆっくりではありますが、会話が出来た状態となった隊員も散見されました。訓練前までは、「頭の中だけの英語」でしたが、今回の訓練を通じ、生きた英会話を経験し「楽しく話せる英語」の必要性を全隊員が感じられたことは、今後の任務遂行上、貴重な第一歩となったと強く感じます。

(第46警戒隊准曹士先任 准空尉 治田 敏雄より)



Field trip to Sado Gold Mine



Cultural exchange through Sado "Ondeko"



Five USAF participants take photo with Japanese colleague at the HQ, Sado Sub Base



## 《 in Yokota (米軍横田基地ホームページから) 》

米軍横田基地ホームページ掲載記事から、空自隊員の米軍基地における特技訓練の実施状況についてここに紹介する。

Yokota 基地の隊員には、地域における様々な不測事態に対応しながら空自のカウンターパートと一緒に働けるという素晴らしい特権がある。このような機会によって米空軍・空自は、意見交換に加えて任務遂行能力も高めることができる。Yokota ではこのような機会は多くあるが、短時間の交流のみでは、日本のカウンターパートについて知らないままであることが多くある。

そこで、第 374 空輸航空団は、空自との関係強化のため一歩踏み込んで、3月15日から24日の間に Yokota 基地で行われた第 16 回目の年度 NCOEP (Noncommissioned Officer Exchange Program: 日米相互特技訓練) に参加する空自隊員をホストすることとした。

今年度の NCOEP には様々な経歴を持つ 16 名の空自隊員が参加しており、日米の参加者にとって、意思疎通を図るとともに異なる運用に対する理解を深める好機となった。



SSgt. Ito and SSgt. Kelly pose for a photo, share a laugh during the NCOEP bowling mixer at Yokota AB

第 374 運用支援隊の気象予報官であり空自中枢気象隊の Ito 3曹を受け持つ Kelly 3等軍曹は、「我々は日本中からの空自隊員をここ Yokota に受け入れ、カウンターパートたる専門職の米軍人と組み合わせる。自分も他の参加者も、仕事の知識を分かち合い、Yokota の能力を空自のパートナーに見せることを嬉しく思っている。私の同僚と日本のパートナーが類似点と相違点を学ぶことができる良き経験となる。このプログラムは、関わる誰



Participants of the 16th Annual Non-Commissioned Officer Exchange Program pose for a photo at Yokota AB, Japan on March 23, 2016

に対しても、相違点から学び自分たちの手順に取り入れる可能性を与えてくれる」と語る。

参加者が経験することは、それぞれの受け入れ兵士と専門分野によって異なり、訓練の場も、医療施設、管制塔、滑走路、C-130 でのフライトと様々である。

Kelly 3等軍曹はこう付け加える。「自分の職務範囲のみならず、兵士が行う全ての業務を知ることによって、我々は Yokota において何をなし得るのかをよりよく理解できる」

参加者の大部分にとって、言葉の壁という難題は常につきまとう。Ito 3曹自身が到着前にそのように言っており、効果的に会話することに神経質になっていた。しかしながら、Kelly 3等軍曹と最初の懇親の場で対面したとき、彼らはさほど苦勞せずにお互いに話しができたので、彼の不安は徐々に消え去っていった。

「言葉の壁は、全ての参加者が直面する、避けようのない難題である。幸いにも、忍耐と我々が持っている多くの題材とによって、我々は始終上手く対話することができた」と Kelly 3等軍曹は言う。毎日課業後に別行動をするのでなく、NCOEP 参加者は、体育活動、ボランティア、夕食までも一緒にした。

第 374 空輸航空団の儀典担当であり NCOEP のコーディネーターである Ms. Takamizu は、「参加者が通常の課業時間中のみならず仕事を離れても一緒に行動することによって、空自からの参加者は Yokota のパートナーとより関わり、より深い関係を築くことができた。Yokota と空自との関係が深化する機会を設けていくことは、日米関係に良い影響をもたらす」と言う。

Kelly 3等軍曹と Ito 3曹は、「時間を共有することは、自分たちの日常生活を取り巻く謎を解き明かしていくのに役立った」と明かす。

「我々は多くのものを共通に持っている。我々は共に軍に属し、同じ仕事をし、好きなスポーツであるテニスの技術レベルさえも似ている。これらのことによって、Zachary (Kelly 3等軍曹のファーストネーム) と友達に



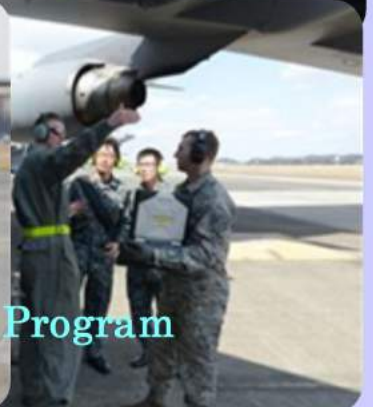
なることは本当に容易であった」とIto 3曹は言う。

今年度の NCOEP は公的には終了したが、本企画を通して新しく生まれた友情の数々は、これからも深まり続けて行くだらう。

(JAAGA 広報理事仮訳)



Several scenes of JASDF participants from all over Japan with their Yokota partners



Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program in Yokota AB



## 平成 27 年度日米優秀隊員表彰 Commendation for JASDF & USAF Brilliant Soldier in FY 2015

平成 27 年度 JAAGA 日米隊員表彰式が、2 月、横田、那覇、及び三沢の空自基地において実施された。本表彰行事は平成 10 年度に開始されて以来 18 回目の実施となり、表彰者数は総計 125 名(空自 71 名、米空軍 54 名)を数えた。

### 【三沢地区表彰式(Misawa AB)】

2 月 19 日(金)、平成 27 年度三沢地区 JAAGA 表彰行事が空自三沢基地において実施された。

米空軍将校クラブにおいて表彰式が、基地幹部食堂において祝賀会食が実施された。空自からは北部航空方面隊司令官尾上定正空将、同副司令官深澤英一郎空将補、第 3 航空団司令兼三沢基地司令今城弘治空将補以下 8 名、米空軍三沢基地からは第 35 戦闘航空団副司令 Col. Travis D. Rex 以下 9 名、三沢基地周辺協力者からは三沢市防衛協会副会長小坂良治氏他 3 名、そして JAAGA からは外薗会長以下 4 名、総勢 28 名の参加者を得ての開催となった。

表彰式は渡邊与秀 2 等空尉以下 25 名の北部航空音楽隊の隊員による日米国歌の演奏から始まり、続いて外薗会長が挨拶し、日本を取り巻く厳しい国際環境と信頼に基づく日米同盟強化の益々の必要性、日米の部隊の平素の活動に対する敬意と謝意、表彰行事の目的の紹介及び JAAGA の活動への積極的なご協力、ご支援に対する謝辞と今後なお一層のご理解、ご協力をお願いを述べた。

今年度の三沢基地における空自側受賞者は、第 1 警戒資料処理隊の大杉昇太郎 2 等空曹で、三沢基地 2・3 曹会会長として、米空軍主催のボランティア活動の企画運営に参加し、米空軍上級下士官就任式等の米空軍行事においては旗手を務めるなど、空自と米空軍との友好親善および相互理解の増進に献身的に尽力した功績が認められたものである。また米空軍側受賞者

は、第 35 戦闘航空団の MSgt. Jon Neidigh で、韓国からの着任早々から、近傍の訓練空域拡大にあたっての安全手順確立の

ための日米部隊間の調整、三沢管制隊の 27 年度航空支援集団管制競技会 1 位獲得への訓練協力などの功績が認められた。外薗会長から、日米両名の受賞者にそれぞれ表彰状と記念楯を授与するとともにその功績を称えた。今城団司令からは、受賞者へのお祝いの言葉とともに、三沢基地は日米友好を象徴する基地であり、友好親善に寄与した隊員を表彰してもらうことは、特に意義深いことであるとの祝辞が述べられた。また、Rex 副司令は 2 名の受賞者の功績を称えつつ、日米友好に努力している現場の隊員達をはじめ JAAGA に対する謝辞が述べられた。

表彰式後の懇親祝賀会においては、三沢つばさ会会長の倉持昌郎氏により、「厳粛な雰囲気の中での受賞は受賞者にとって一生の名誉になるであろう。このことを心に刻んで欲しい」とのお祝いの言葉とともに、更なる友好親善を祈念して乾杯の音頭が取られた。その後、日



JAAGA Award  
(Citation and Plaque)



At Misawa on 19 Feb. 2016, TSgt. Ohsugi and MSgt. Neidigh are commended by President Hokazono and celebrated by Lt. Gen. Oue, Maj. Gen. Fukazawa, Maj. Gen. Imaki of JASDF, Col. Rex of 35th FW and other attendants



米の受賞者から挨拶があり、MSgt. Neidighからは、日ごろからの奥様の支えに謝するとともに、日米両空軍の友人のために引き続き努力したい旨の決意が述べられた。そして大杉2曹からは、本日の受賞が、自分を取り巻くすべての人の力の賜物であるとの謝辞と、引き続き2・3曹会の活動を通じて日米下士官交流の増進のために努力したい旨の決意が、若さ溢れるジェスチャーとともに英語で述べられた。最後にJAAGA三沢支部の丸山支部長による乾杯の発声があり、平成27年度三沢地区JAAGA表彰行事は有意義かつ暖かい雰囲気の中で幕が閉じられた。

三沢基地の日米のスタッフの皆様、そして課業時間外に、あるいは朝早くから、会場のセットアップ及び行事進行上のご支援・ご協力を戴いた大勢の三沢基地隊員の皆様、大変お世話になりました。お陰様で三沢基地でのJAAGA表彰行事を今年度も素晴らしい形で実施することが出来ました。本当に有難うございました。来年もまた宜しくお願いします。

(秦理事記)

### 【関東地区表彰式(Yokota AB)】

2月5日(金)、平成27年度関東地区JAAGA表彰行事が空自横田基地において実施された。

表彰式は基地講堂、祝賀会食は将官宿舎レセプションルームにおいて開催され、空自からは航空総隊司令部幕僚長荒木正嗣空将補、作戦システム運用隊司令兼横田基地司令鎌田修一1等空佐、航空気象群司令塩田修弘1等空佐、中部航空警戒管制団司令部監理部長石戸谷圭介2等空佐以下16名、米空軍からは第5空軍副司令官 Brig. Gen. David A. Krumm、第374空輸航空団司令 Col. Douglas C. DeLaMater

以下8名、横田基地周辺協力者として横田基地協力会副会長天野博氏、横田基地OB会会長糸永正武氏他計5名、そしてJAAGAからは菊川副会長以下4名、総勢33名の参加を得て実施された。

表彰式は、



(←) TSgt. Ohsugi and his wife

(→) MSgt. Neidigh and his wife

菊川副会長から、空自及び米軍の活動に対する謝意と平素からのJAAGAの活動へのご支援に対する感謝、そして本表彰行事に係る関係者、特に横田基地による積極的なご協力、ご支援に対する謝辞が述べられた。

今年度の空自側受賞者は、作戦システム運用隊の平岡康宏2等空曹(空自横田基地)、航空気象群の上野信吾空曹長(府中基地)及び中部航空警戒管制団司令部の松尾麻由美空曹長だった。平岡2曹は、給養技術員として、日米の様々な交流行事等において遺憾なくその技能を発揮し、特に27年2月米空軍調理競技会「ヘネシーカップ」に協力参加し、卓越した調理技術を披露したことなど、上野曹長は、約14年間にわたり、府中基地行事において米空軍との調整を円滑に行い、米軍招待者来基時の接遇、案内等に高い英語能力をもって積極的かつ真摯な態度で臨んできたことなど、松尾曹長は、米空軍関係者を招待して行う各種基地行事における連絡調整業務において、米空軍主要幹部夫人の接遇や浴衣の着付けなどの日米文化交流に積極的に関わるなど、それぞれ日米各種交流行事での積極的な



At Yokota on 5 Feb. 2016, CMSgt. Ueno, TSgt. Hiraoka, CMSgt. Matsuo and 1st Lt. Probasco are commended through Vice President Kikukawa and celebrated by Maj. Gen. Araki, Col. Kamada, Col. Shiota, Lt. Col. Ishidoya of JASDF, Brig. Gen. Krumm, Col. DeLaMater of USAF and other attendants



貢献や日米関連事業での活躍が認められたものである。また米空軍側受賞者は、第 374 空輸航空団の 1st Lt. Christopher Probasco(米軍横田基地)で、30 名を超える空自幹部の英語能力の向上や日米の尉官交流にかかわる数々のイベントの企画実施における功績が認められた。菊川副会長から、日米 4 名の受賞者それぞれに表彰状と記念楯が授与され、その功績が称えられた。鎌田作戦システム運用隊司令、塩田航空気象群司令、石戸谷中部航空警戒管制団司令部監理部長及び第 374 通信中隊長 Lt. Col. David Blau の 4 人から、受賞者を称えとともに、日米同盟が一層重要になる中、強固な関係を築く上で相互の一層の信頼関係向上が不可欠であり JAAGA が両者の架け橋になってくれるようお願いする旨の祝辞が述べられた。なお、Lt. Col. Blau の祝辞は、米側受賞者の 1st Lt. Probasco が日本語通訳を行った。

表彰式後の祝賀会食においては、まず横田基地協会の副会長の天野博氏の祝辞と乾杯の音頭の後、4 人の受賞者から、日本側は英語、米国側は日本語で、それぞれ今回の受賞を光栄に思うこと、支えてくれた上司、同僚、家族への謝意、そして今後も一層日米関係強化のため尽力するとの決意が表明された。特に、松尾曹長及び 1st Lt. Probasco の語学レベルは参加者を唖らせるものがあり、熱い拍手を浴びた。松尾曹長のご主人は、松尾尚人 3 等空佐(統幕勤務)で、夫婦揃って制服での授賞式参加は珍しい光景だった。こうして平成 27 年度関東地区 JAAGA 表彰行事は有意義かつ楽しい雰囲気の中で幕が閉じられた。

横田基地のスタッフの皆様、そして会場のセットアップ、祝賀会食等の行事進行上のご支援を頂いた大勢の基地隊員の皆様、本当に有難うございました。来年もまた宜しくお願いいたします。

(秦理事記)

### 【沖縄地区表彰式(Naha AB)】

2 月 12 日(金)、平成 27 年度沖縄地区 JAAGA 表彰行事が航空自衛隊那覇基地で実施された。

表彰式は基地講堂において、祝賀会食は基地隊員食堂において実施された。空自からは南西航空混成団司令荒木淳一空将、第 9 航空団司令川波清明空将補以下 8 名、米空軍からは第 18 航空団副司令 Col. Christopher R. Amrhein 以下 5 名、那覇基地協力者として沖縄県防衛協会事務局長山縣正明氏他 5 名、そして JAAGA からは織田副会長以下 5 名、総勢 24 名の参加者を得て開催された。

基地講堂において実施された表彰式は、安藤義隆 2 等空尉以下 20 名の南西航空音楽隊の隊員による日米国歌の演奏から始まり、続く織田副会長の挨拶では、平



- (↑) CMSgt. Matsuo and her husband  
TSgt. Hiraoka and his wife  
CMSgt. Ueno  
(↓) 1st Lt. Probasco and his wife



素のわが国の安全保障への貢献に対する日米両部隊へのお礼、本表彰事業の意義、被表彰者への祝意と感謝、そして本表彰行事に係る多くの関係者、特に那覇基地の積極的なご協力、ご支援に対するお礼の言葉が述べられた。

今年度の空自側被表彰者は南西航空施設隊の高間宗仁空曹長で、平素から日米両国の関係強化の重要性を深く認識し、平成 19 年イラク復興支援派遣輸送航



空隊勤務において、あるいは那覇基地准曹会会員としてのボランティア活動において、積極的に日米交流に邁進した功績が認められた。また米空軍側被表彰者は第18航空団の Capt. Joshua Caragan で、那覇基地主要幹部への通訳支援を実施し、日米尉官クラス集団 BLOG のキーパーソンとして活躍し、航空自衛隊隊員の英語能力向上に貢献するなどの功績が認められた。織田副会長から、日米の被表彰者に表彰状と記念楯が授与され、被表彰者の功績が称えられた。また、残波ロイヤルホテルのご好意による同ホテル無料宿泊券2名分が副賞として、残波ロイヤルホテル勤務の JAAGA 会員小川徳彌氏から、それぞれの被表彰者に手渡された。その後、空自代表の川波基地司令と米空軍代表の Amrhein 副司令から祝辞があり、受賞者へのお祝いと敬意の言葉とともに、日米両国の協調がこの地域の安定と繁栄に寄与していること、そして空自と米空軍との間の絆強化の重要性、受賞者の活動が仲間意識と団結を強化することに貢献したこと、家族等の支援への謝辞などが異口同音に述べられた。

表彰式後の祝賀会食においては、まず沖縄県隊友会会長の藤田博久氏からの祝辞と乾杯の発声があり、日米出席者和気藹々の祝賀会となった。高間曹長は、千歳と那覇を交互に何度も転勤してきた施設のエキスパートで、真面目で規律正しい模範的な隊員ぶりが見て取れた。大阪大学卒の Capt. Caragan は、極めて流暢な日本語(標準語でした)が話せる上、奥様は日本人ということもあり、周囲の日本側参加者との間で話題が絶えなかった。被表彰者挨拶では高間空曹長が奥様を含めて周囲の人々の支えがあって受賞できたこと、後輩を育て、今後も日米友好の要石になる旨、英語で述べた。

また Capt. Caragan は、受賞が名誉であること、日米両空軍の友好関係強化に今後とも頑張りたいなどの決意を述べた。

このように平成27年度沖縄地区 JAAGA 表彰行事は、受賞者を称える温かな雰囲気の中で実施出来た。これも事前の調整や準備に尽力頂いた那覇基地、嘉手納基地ス



(↑) CMSgt. Takama and his wife  
(↓) Capt. Caragan and his wife



タッフの皆様、そして会場のセットアップ、祝賀会食等の行事進行上のご支援を賜った大勢の那覇基地隊員の皆様のお陰であり、心より感謝申し上げます。本当に有難うございました。来年度もまた宜しく願いいたします。

(秦理事記)











At Naha on 12 Feb. 2016, CMSgt. Takama and Capt. Caragan are commended through Vice President Orita and celebrated by Lt. Gen. Araki, Maj. Gen. Kawanami of JASDF and Col. Amrhein of 18th Wing and other attendants



## 平成27年度日米優秀隊員表彰(受賞者及び功績の概要) 2015 JAAGA AWARD Winner

平成27年度JAAGA賞の受賞者の所属・氏名・の友好基盤と信頼関係の構築への多大な貢献に対し功績等は下表の通りである。彼らの日米両エアフォーとして表彰状と記念品を贈呈して顕彰した。スの友好親善と相互理解の増進並びに日米両国間

平成27年度日米優秀隊員表彰(受賞者及び功績の概要)  
2015 JAAGA AWARD Winner

部隊	受賞者	功績の概要
空 自 衛 隊 J A S D F	 2等空曹 大杉 昇太郎 TSgt. Shotaro Ohsugi	三沢基地2曹3曹会会長として、米空軍主催のボランティアの企画運営、米空軍の行事への旗手としての参加等、米空軍との親睦及び信頼関係の構築に貢献。  As the president of Misawa JASDF 2/3(T&S Sgt. Association), contributed to promoting JASDF-USAF friendship and confidence through participating in USAF's volunteer activities and official events.
	 空曹長 上野 信吾 CMSgt. Shingo Ueno	府中基地行事への招待等について第5空軍との調整、接遇を円滑かつ真摯に実施するとともに、米軍行事を支援する等、関係する米空軍及び空自部隊から高い評価を得ており、日米友好関係の一層の強化に貢献。  Through smooth and well-considered planning and hosting for USAF members to Fuchu base events, assisting USAF events, earned reputation widely from JASDF and USAF and contributed to further promoting Japan-US friendship.
	 2等空曹 平岡 康宏 TSgt. Yasuhiro Hiraoka	給養技術員として、27年2月米軍ヘネシーカップ(調理競技会)に参加し卓越した調理技術を披露するとともに、日米間の各種会食において調理責任者としての職務を果たし、日米の交流の深化に貢献。  As a Food Service specialist, participated and demonstrated excellent service in USAF Hennessy Award (food service competition) and fulfilled responsibility as the chief of food service for bilateral dining, thus contributed to deepening Japan-US relationship.
	 空曹長 松尾 麻由美 CMSgt. Mayumi Matsuo	米空軍関係者を招待して行う各種行事における連絡調整業務、米空軍横田基地主要幹部夫人の接遇及び浴衣着用等の日本文化体験による入間基地主要幹部夫人との交流を深化させる等、日米友好親善に貢献。  Through providing good planning and coordination for invitation of USAF member to JASDF events, deepening relationship between wives of USAF and Iruma, JASDF, contributed to promoting Japan-US friendship.
	 空曹長 高間 宗仁 CMSgt. Munehito Takama	空自の代表として相応しい隊員であり、イラク復興支援派遣輸送航空隊勤務や米空軍施設部隊等競技会での活躍、米軍ボランティア活動への参加を通じて、日米友好、日米信頼関係の向上に貢献。  By demonstrating exemplary grounding and through IRAQ Reconstruction Support Airlift Wing duties, participation to Readiness Challenge (USAF Civil Engineer competition) and USAF volunteer activities, contributed to improving Japan-US friendship and confidence.
	 MSgt. Jon Neidigh 1等軍曹 ジョン ナイデグ	F-35シミュレーター導入のための防衛省調査団に対する支援、近隣の訓練空域の拡大にあたっての安全手順確立のための日米部隊間の調整、三沢管制隊の支援集団管制競技会2位、1位獲得への支援などに貢献。  Supported Defense Ministry's investigating commission for F-35 simulator, engaged in bilateral work to secure safety upon enlarging training airfield, and contributed for Misawa Air Traffic Control squadron to win ATC competitions.
米 空 軍 U S A F	 1stLt. Christopher Probasco 中尉 クリストファー プロバスコ	空自幹部の英語能力向上、基地周辺における日米文化交流の促進、日米の尉官交流の企画実施、日米共同作戦機能強化のため浜松基地との通信機能確立のための横田基地支援計画の補正等に貢献。  Contributed to improving JASDF officers' English proficiency, advancing local cultural exchanges, arranging events for the Lieutenants Alliance Association, and streamlining the Yokota Base Support Plan for enhancement of joint operation function.
	 Capt. Joshua Caragan 大尉 ジョシュア キャラガン	那覇基地主要幹部への通訳支援、作戦運用面での日米間の議論、日米尉官クラス集団(BLOG)立ち上げを通じ、日米同盟相互運用性の強化、空自隊員の英語能力向上に貢献。  Through providing interpretation support to JASDF leaders on Naha base, facilitating joint discussion on operational aspect, developing Bilateral Leadership Officer Group (officers below major), contributed to enhancing interoperability and improving communication skills of JASDF members.



## SPORTEX'15B 開催

### “SPORTEX'15B” took place at Tama Hills G.C.



Under good conditions “no wind, cloudy weather and occasionally sleet & clear”, 68 players including 13 players from JASDF, 22 players from USAF and 33 JAAGA members enjoy playing field meeting and friendship at Tama Hills Golf Course on 26 Mar. 2016

3月26日(土)、SPORTEX'15Bが米軍多摩ヒルズ・ゴルフ・コースにおいて開催された。

当日はやや薄曇りで肌寒さが感じられたが風もなく絶好のゴルフ日和であった。今回の大会には、空自から空幕総務部長金古真一空将補及び空幕監理監察官小川能道空将補他11名が、米空軍からは第5空軍司令官 Lt. Gen. John L. Dolan、同副司令官 Brig. Gen. David A. Krumm 他20名が、JAAGAからは外薗会長をはじめ会員33名が参加した。航空幕僚長杉山良行空将は要務のため欠席となった。なお、本大会の開催に当たっては米軍多摩ヒルズ・ゴルフ・コース関係者からの全面的なバック・アップと日米双方から3名の競技支援を受けた。

早朝5時、まさに払暁とともにゴルフ・コースがゲート・オープンされると参加者が続々と入門、早速ドライビング・レンジで練習を開始する参加者もいて早くも大会の盛り上がりを感じられた。5時45分からクラブ・ハウスにて朝食、懇談等の後、6時30分から開会式が行われた。開会式では外薗会長、金古総務部長及びDolan司令官からそれぞれオープニング・リマックスを頂き、記念撮影の後、各パーティ毎にそれぞれのスタート・ホールに着き、7時にショット・ガン方式で一斉に競技が開始された。

桜のつぼみが膨らみ開花間近の多摩ヒルズは、時折日が差し、また時折みぞれがチラつく複雑な天候であったが、相変わらずの無風状態でありスコア・メイクには持って来いの条件。スコアの出来を天候のせいにはできないとばかり皆真剣にクラブを振りつつも日米友好と会員間の友好親善に努め和気藹々の雰囲気の中に約5時間に及ぶ熱戦が終了した。

競技終了後、参加者はプレー内容を振り返りながら、各パーティ毎にテーブルを囲み歓談しながら昼食を終え、12時



Opening remarks by Mr. Hokazono, president of JAAGA and Lt. Gen. Dolan, 5AF/CC

30分から成績発表、表彰式が行われた。表彰式では米側成績優秀者の Mr. Chong Delisi に JAAGA 会長賞が、日本側成績優秀者の佐口謙一氏に第5空軍司令官賞が、当日賞26位の Mr. Fisher Nelson に航空幕僚長賞が贈られた他、飛び賞、ドラコン及びニアピン賞等の各賞が贈られた。また、外薗会長から本競技会でボランティアを務めて頂いた5空軍司令部 Ms. Noriko Tojo と多摩ヒルズ・ゴルフ・コース及びクラブ・ハウスの関係者にお礼の品が贈呈された。閉会式においては、金古総務部長及びDolan司令官から本競技会招待への謝意が述べられ、最後に外薗会長から本競技会開催に御尽力を頂いた米軍関係者へのお礼とJAAGA関係役員への労いの言葉が述べられた。

こうして午後1時には閉会式も終了し、SPORTEX'15B参加者は皆プレーへの満足感とビッグなハンバーガーによる満腹感に酔いしれながら多摩ヒルズ・ゴルフ・コースを後にした。

(早坂理事記)





(rightmost) Gen. Tohtake, ex-COS, ASO (Ret.)  
(leftmost) Maj.Gen. Kaneko, Director, General Affairs Department, ASO



(center left) Gen. Kataoka, ex- COS,ASO (Ret.),  
(center right) Maj.Gen. Ogawa, Inspector General, ASO



**Memories of SPORTEX'15B**



← Luncheon meeting and cooling down after playing golf →



Winner : Mr.Chong Delisi  
presented by President ofJAAGA



2nd Prize : Mr. Kenichi Saguchi  
presented by 5AF/CC



Lucky prize(26th) by COS ASO  
: Mr. Fisher Nelson presented by  
Maj. Gen. Kaneko



5th : Mr. Joe Renteria



10th: LtCol. David Mansberger



15th : Mr. Takashi Kimura



20th : Mr. Toshihiro Tanimura



30th : LtCol. Seiichi Nakade



40th : MSgt Toshiyuki Okabe



50th : Capt. Lee Boone



70th : Mr. Hiroo Abe



Closing remarks by 5AF/CC



Ms Noriko Tojo, interpreter



Goods of thanks to restaurant staff



Closing remarks by JAAGA President



## JAAGA 講演会: 空幕防衛部長

### Lecture for JAAGA members on 25 Feb. 2016 at Hotel Grand Hill Ichigaya

2月25日(火)14時から約2時間にわたり、グランドヒル市ヶ谷「芙蓉の間」において、昨年に引き続き航空幕僚監部防衛部長三谷直人空将補を講師としてJAAGA講演会が開催された。今回も「航空自衛隊の現状と課題」と題して、南西域をはじめ日本を取り巻く各種安全保障環境の変化を捉えつつ、航空自衛隊が直面する状況を見据え、丁寧な語り口により、その現状と課題が語られた。

講師は防大29期生で職種は航空機整備であり、空幕人事計画課長、5空団司令、1補長、防衛監察本部監察官を歴任、26年8月より現職にある。講演は、その全体像を聴講者がイメージアップ出来るように、「航空自衛隊の現状」と「今後の課題」に大別しつつ、以下10項目にそって行われた。

#### < 航空自衛隊の現状 >

- I 我が国周辺の安全保障環境
- II 平和安全法制
- III 大綱、中期及び28年度予算案
- IV 日米防衛協力
- V 空自の最近の活動等
- VI 防衛協力・交流

#### < 今後の課題 >

- VII 戦闘機部隊等の体制移行
- VIII 松島基地の復興
- IX 宇宙利用の推進に係る取り組み
- X 女性戦闘機操縦者の養成

この論旨の流れに沿いつつ、昨年から1年間で更に大きく変化した安全保障環境や新たに整備された平和安全法制等の具体的内容を丁寧に説明し、各項目ごとに自らの所見を交え陰影を深めながら講演は進められ



Guest speaker Maj. Gen. Mitani, Director, Defense Planning and Policy Dep., gives a lecture on “The present situation of and challenge to JASDF”

た。

#### ◎ 講演内容< 航空自衛隊の現状 >

まず、空自のおかれた現状を整理し、その概要について一つ一つ具体的事象・案件を踏まえつつ語ったが、激しく動く安全保障環境と広範多岐にわたる任務を遂行する空自の姿を如実に示す内容であった。

Iの我が国周辺の安全保障環境については、冒頭、東シナ海及び南シナ海(西沙・南沙諸島)の現況を示しつつ、日本周辺空域における中国やロシアの航空機等による活動の活発化、北朝鮮の核実験・弾道ミサイル等の動向を踏まえ、『力』を背景とした現状変更の試みなど、高圧的とも言える対応を継続させている国に対しては、その時々適切な対応を取ることが緊要であると述べた。

IIの平和安全法制では、新たに整備された平和安全法制の内容を空自の任務に即しつつ概観し、在外邦人等の保護措置を実効ならしめる課題等にも言及がなされ、任重き空自の現況が実感された。



JAAGA members listen to the lecture with great interest and respect



IIIでは大綱、中期及び28年度予算案における防衛力整備上の主要事業に基づき、中期防に示された「島嶼部に対する攻撃への対処」等の体制を着実に進展させていく計画を説明した。(常統監視体制の整備、航空優勢の獲得・維持)

IVにおいては、日米防衛協力の中核として「ガイドラインの見直し」に係る新たな日米調整の枠組みとして「同盟調整メカニズム(ACM)」及び「共同計画策定メカニズム(BPM)」の調整・計画フローを説明し、平時から切れ目のない、関係省庁機関を関与させたメカニズムが日米同盟の深化に及ぼす重要性を語った。更に、横田の総隊司令部と米第5空軍司令部間のFace-to-Faceの活動に言及しその深化の度合いに意を強くすると同時に、JAAGAの諸活動により空自と米空軍間の人的交流がより重層的に促進されている事に賛辞を表した。

また、近年の具体的な日米防衛協力における空自の取り組みについて語ったが(RFA・CNG等の日米共同訓練、グローバルホークの三沢一時展開、TPY-2経ヶ岬配備、訓練移転、HA/DR)、それらの具体的な取り組みに空自の弛まず前進する軌跡が感じ取れた。更に、その新たな取り組みの具体例として「ミクロネシア連邦等における日米豪人道支援・災害救援共同訓練」の紹介があった。米空軍がOperation Christmas Drop(OCD)として1952年以来実施してきたグアム、パラオ諸島方面への物量投下訓練に日豪が共に初参加し、空自C-130Hからのピンポイント投下に訓練参加各国から賞賛の声が起こったとの話に、誇らしげに頷く聴講者も散見された。

更に、全般的な防衛協力・交流においては、空幕長等と各国空軍首脳間のハイレベル交流が拡大し、前齊藤空幕長によるHA/DR共同訓練への参加提唱が実を結びオブザーバー参加国が増える成果が得られ、また同時に、実務者間、部隊間交流そして教育交流・多国間対話も積極的平和主義を支える重要な施策として鋭意推進されていることが語られた。

Vの空自の最近の活動等として、南スーダンUNMISSに係る航空輸送、ネパールへの国際緊急援助活動、昨年9月の関東・東北豪雨への災害派遣、北朝鮮核実験に係る特別集塵飛行、現政権下だけでも39回にわたる特別輸送機の運航について言及があったが、空自

が実施した「八面六臂の活躍」を十二分に想起させる内容であった。

VIでは米国以外の国々との防衛協力・交流として、KC-767の運航によりCS課程学生の豪訪問が実施された事例や、前齊藤空幕長によりベトナム・フィリピンに加え6年振りで韓国への往訪がなされ、ミャンマー、カナダの初来訪と共に各国空軍との更なる相互理解と関係強化が図られた事例を防衛交流の主な事項として紹介した。

また、東南アジア諸国空軍との防衛協力・交流として「能力構築支援」を挙げ、「空自の有する知見を活用し開発途上国の空軍等の能力向上を支援」する活動を紹介し、ベトナム、インドネシア、フィリピン等へ12回にわたり「飛行安全」「航空気象」「国際航空法」等の教育指導を行った活動の一端を説明した。この防衛協力・交流では「東南アジア地域の安定に資するものであり、各国空軍のニーズに応じて推進し、相手国に寄り添い、対等なパートナーとして相互交流の関係を深める」ことを活動趣旨としており、それを“HSI: Highly-motivated, Supportive, Interactive”と称していること、加えて、「能力構築支援」という用語を使用することによって相手国に尊大な印象を与えないよう、空自では当該活動については「能力交流」と呼称していることについて紹介した。今後については、国際ルールに基づく空自の取組を地域のスタンダードとし、地域全体の安全保障環境の安定化を図っていききたいと語った。

#### ◎ 講演内容<今後の課題>

講演の後段として、空自の対処すべき直近の課題に関し、具体的な項目を挙げ紹介した。

VIIにおける戦闘機部隊等の体制移行については、先月1月31日の第9航空団新編を皮切りに27～28年度の間、三沢、百里、小松、築城、新田原各基地にまたがる大規模な戦闘飛行隊等の入れ替えが喫緊の課題と語った。南西域への対処、新機種導入の準備、減勢機種の効率的維持等、各種の狙いを有した新たな陣立ての説明に各聴講者は共にプレゼン画面の移行

Participants ask enthusiastic questions, and sincere answers result in great applause





計画図を熱心に見つめた。

VIIIの松島基地の復興に係る説明では、3m嵩上げされた飛行場地区、新設された飛行整備格納庫及び燃料／システム格納庫等の写真を身を乗り出し見入る聴講者も多く、JAAGA 会員夫々の松島基地に対する想いの深さが感じられた。震災から丸5年を経た本年3月から松島基地での第21飛行隊の戦闘機操縦教育を再開開始するとの説明に、空自にとっての震災復興が大きな峠を越えつつあるとの感慨が込められていた。

IXは宇宙利用の推進に係る取り組みに関するものであり、スペースデブリや対衛星兵器を用いた攻撃等といった脅威に対する監視活動である宇宙状況監視や今後の事業計画についての説明があった。防衛省として新たに対処すべき宇宙空間に関し、日米両国間の建設的なギブ&テイクの関係を構築していく主管組織が空自であることをあらためて認識する内容であった。宇宙空間という新たな対処空間の出現に、聴講者一同、あらためて多種多様な任務に対応を迫られる空自の現状と課題に想いを馳せた。

講演の最後の項目として、Xでは女性戦闘機操縦者の養成が紹介された。これまで母性の保護、経済的効率性等の観点から、長らく戦闘機操縦者への女性操縦者の配置は制限されてきたが、空自におけるこれまでの女性操縦者の実績や米空軍における女性戦闘機操縦

者の実績等を参考にしつつ、今般その配置制限が解除されることとなった。その結果、早ければ平成30年度に女性戦闘機操縦者が誕生するとの話に、JAAGA 会員にとっては新鮮かつ新世代の空自を感じさせる聴講内容となった。

#### ◎ 質問及び会長の言葉

2時間弱の講演の後、聴講者から「無人機の運用」「防衛生産技術基盤」に係る質問がなされたが、いずれも現下の厳しい状況に対する問題認識と前進する空自に想いを込めたものであり、講師からもそれらの課題に係るビジョンと努力を指向する方向性が語られた。

最後に、外衛会長から、「空自の現状と課題に係る丁寧かつ具体的な説明」に対する謝辞と共に、「各種の制約がある中で、任重き課題が増えていく」空自の現状と将来に言及しつつ、空幕防衛部長の職にある講師を労い自愛を祈念する旨、閉めの挨拶がなされ講演会を終了した。(杉山理事記)



President Hokazono presents a memento to Maj. Gen. Mitani

## 平成27年度「つばさ会／JAAGA 訪米団」報告会 Report to JAAGA members on 25 Feb. 2016 at Hotel Grand Hill Ichigaya

平成27年度の「つばさ会／JAAGA 訪米団報告会」が2月25日(木)1320からグランドヒル市ヶ谷「芙蓉の間」においてJAAGA 講演会に先立ち実施された。

講演に先立ち外衛健一朗会長より「冷たい天候の中、御参集頂いたことに感謝する」旨の挨拶がなされると共に、空自出身の宇都隆史参議院議員からの祝電が披露された。当日はJAAGAによる米空軍嘉手納基地等研修の初日と日程が重なってはいたが、彌田清担当理事の司会進行により「石野次男理事によるJAAGA 訪米団報告会」及び「空幕防衛部長三谷直人空将補による講演」が順次実施され、正会員61名、法人会員22名、個人賛助会員4名、計87名が熱心に聴講した。

30分余りの密度の濃い報告の最後に、今回の訪問に際して支援を受けた空幕の関係幕僚各位、事前の調整から現地での案内まで多大な支援を受けたPACOM 司令部連絡官の齋藤1陸佐、PACAF 司令部連絡官の竹岡1空佐、田中2空佐および猪山2空佐、防衛駐在官の小川1空佐と廣田2空佐、そしてつばさ会及びJAAGA 会員に感謝の念を示しつつ、石野

(次)理事によるJAAGA 訪米団の報告は終了した。

報告内容の細部は、JAAGA ホームページ <http://www.jaaga.jp/> をご参照ください。なお、『JAAGA だより49号』にも関連記事「つばさ会/JAAGA 訪米団」AFA 総会参加等報告(米沢理事記)があります。(杉山理事記)



JAAGA Director Ishino reports on the summary of "Tsubasakai-JAAGA" delegation's visit to U.S. including attending to AFA General Meeting



## 平成 27 年度 米空軍嘉手納基地等研修 JAAGA Members' Visit to Kadena AB and Naha AB on 25 ~ 26 Feb. 2016

2月25日(木)、26日(金)の2日間、JAAGA 会員による米空軍嘉手納基地及び航空自衛隊那覇基地の研修が行われた。研修団は、正会員の秦啓次郎氏を研修団長、法人賛助会員の西山利幸氏を研修副団長とする正会員5名、賛助会員24名(法人12名、個人12名)及びJAAGA 理事5名(平田、藤田、伊藤、池田、木村(和))の総勢34名で結成され、1日目の夕食懇親会には、地元沖縄支部から石津支部長及び木村事務局長も加わった。

日米の主要指揮官から地域の情勢、部隊の運用、指揮統率等の話を直接聴き、現場で任務に当たる隊員の姿を目の当たりにし、参加者一人一人が南西域における防衛任務の現状と意義を実感するとともに、JAAGA 会員としてこれからも見聞を広め日米現役を応援していく気概を新たにしたり、実り多い研修であった。

集合・解散地である入間基地、研修先的那覇基地、嘉手納基地の何れにおいても、管理事項を含めて万全の体制で研修団を受け入れ随所に細やかな気配りをして頂いたことに、改めて感謝申し上げる。

### 【1日目(2月25日(木))】

09:10 入間基地発 12:50 那覇基地着

前夜来の降雪による家屋・車の屋根の積雪は稲荷山公園駅に近づくにつれて度合いを増し、入間基地は、さながら春先間近の雪国の様であった。そんな中、0715頃から逐次参加者が稲荷山門に集まり始め、入間基地の隊員も寒い中人員掌握にあたってくれ、定刻5分前の0745には全員が集合し、基地車両の支援を受けて空輸ターミナルに移動した。中部航空方面隊司令官平本正法空将、中部航空警戒管制団司令兼入間基地司令山本祐一空将補、第2輸送航空隊司令高垣康二1等空佐の同席と多くの隊員の温かいもてなしの中、0800から結団式が、理事紹介、研修団長・副団長挨拶、各参加者挨拶の順に行われ、認識票を受領した後国旗掲揚を迎え、参加者一同の気持ちが一気に引き締まった。0850、特別便 C-1 型輸送機 13 号機に搭乗し、0910 離陸、一路那覇基地へと向かった。今回の体験搭乗は予定飛行時間 3 時間 20 分の長丁場であり多くの参加者にとってトイレは心配であったが、出発前に高垣 2 輸空隊司令から頂いた「C-1 は雪下ろししました。トイレが心配なら暖かくしておきます」との配慮が心強かった。離陸後 30 分が過ぎた頃、機長の計らいによって、一人ずつコックピットを見学できた。その後、読書する人、目を閉じて休息する人等



In the cabin of C-1 to Naha, everybody has a chance to look into cockpit

様々であり、一時的に気流の乱れがあった以外飛行は安定しており、1250 那覇基地に到着した。那覇空港離発着機の混雑により予定より飛行が 20 分長引いたにも拘わらず、誰一人として機内の簡易トイレのお世話になる人はいなかった。

南西航空混成団司令部幕僚長湯瀬邦彦 1 等空佐と同総務部長千秋進 1 等空佐の出迎えを受け那覇基地に到着した後は、基地側の手際よい対応により、速やかにバスに乗車し、司令部庁舎で無事トイレに駆け込み、1310、南西航空混成団司令荒木淳一空将、第9航空団司令兼那覇基地司令川波清明空将補、那覇基地各部隊長等の出迎えを受け会食場に入った。「めんそーれ、はいさい、沖縄研修ようこそ」のアナウンスに続き、荒木南混団司令から1月31日の9空団新編を含む沖縄の状況、嘉手納基地との良好な関係、JAAGA への謝意等を含む歓迎の挨拶があった後、空自主要幹部との会食が始まった。卓上には参加者一人一人の名札が置かれ、空自幹部の話題提供等ホスピタリティー溢れる対応により、20 分程度の短時間であったが、和やかな雰囲気の中、部隊食に舌鼓を打った。



Enjoying the Base lunch with commanders in Naha AB at the Officers Mess Hall



### 13:50 ~ 14:30 那覇基地司令概況説明、南混団司令講話

昼食後バスで司令部庁舎に移動し那覇基地での研修に入ったが、到着の遅れにより既に計画よりも40分近くのビハインドだったため、表敬を短時間で切り上げ、講堂に移動した。

1350から川波基地司令による那覇基地概況説明が行われた。空幕広報室長時代の「空飛ぶ広報室」にまつわるエピソードや、初めての部隊であった304飛行隊がこの度9空団に編成されたのは何かの縁かもしれないとの自己紹介に続き、那覇基地の概要、使用区分、沿革、基地所在部隊等、その他(地元との連携)・日米共同等、緊急発進の概要(増加傾向にある対応の6割が南混団である旨を含む)等が、精力的に話された。9空団新編による変化についての会員の質問にも端的に答えた上で、30分の予定を10分程度に切り詰めて南混団司令の時間を確保した臨機の対応は、最前線の部隊指揮官らしい即応性に溢れたものだった。

引き続き荒木南混団司令から、「南西域における最近の情勢」の表題で、南混団についてその名称の意味を含めて紹介があった後、周辺国の情勢・動向、平成24年9月11日の尖閣国有化以降の南西域の情勢について、現場最前線での見方を交えた講話がなされた。最後に、航空活動が広域化・複合化・多様化する中で、付け入る隙を与えない万全の対応と南西域における体



Courtesy call on Lt. Gen. Araki, Commander of Southwestern Air Composite Division and Maj. Gen. Kawanami, Commander of 9th Wing and Naha AB

制整備を着実に進めることによって、南混団は「南西域の護りの要」としての責務を完遂していく旨、及び、精強化を追求し南混団を更に飛躍させる好機にある、との力強い思いが披露され、一同航空自衛隊に対する感謝の念と信頼感を強くした。

### 14:40 ~ 15:30 那覇基地→嘉手納基地

空自車両で高速道路経由、嘉手納基地に移動した。嘉手納第1ゲートの入門手続きは、JAAGA研修団のために事前審査に基づき現場手続きを簡略化するという基地司令の配慮により、極めて短時間かつスムーズであった。また、道中案内してくれた南混団総務課幹部が各自の荷物の米軍車両への積み替えの労を担ってくれたおかげで、我々の研修時間が最大限確保された。また、嘉手納基地滞在中を通して基地広報局渉外部員(部長、渉外官)等が案内、通訳等の便宜を図ってくれた。

### 1540 ~ 1645 第18航空団司令ミッション・ブリーフィング

1535、第18航空団司令兼嘉手納基地司令 Brig Gen Barry R. Cornish の出迎えを受け、司令部庁舎内ブリーフィング場に入ると、一人一人に研修資料が手渡された。

1540からCornish団司令の歓迎挨拶と嘉手納基地勤務2回目である旨を含む自己紹介があり、引き続いて団司令自らによって、第18航空団の概要として、歴史(米空軍の中でも唯一、創設以来米本土に配置された事のないユニークな部隊)、変遷(18戦闘航空団→18戦闘爆撃航空団→18戦術戦闘航空団→18航空団)、太平洋地域の要石としての重要性、訓練空域、戦略的影響力、人道支援・災害救助活動、国連軍後方部隊としての位置づけ(司令部庁舎前に国連旗を掲揚)、太平洋空軍の戦略、18航空団「Shoguns」の任務・編成・装



Maj. Gen. Kawanami, Base Commander, gives quick and punctual briefing on Naha AB



Lt. Gen. Araki gives a lecture on the recent situation of Combined South Area





Brig. Gen. Cornish, Commander of 18th Wing and Kadena AB, gives a lecture on the history and mission of the Wing and Base

備・施設、所在部隊、地元との関係等について、30分以上に及ぶ説明がなされた。一同熱心に聴講するとともに、嘉手納基地は45km<sup>2</sup>もの地積を有し、日本の三沢基地、横田基地、韓国の烏山(オーサン)基地、群山(クンサン)基地がすっぽり入る大きさであるとの説明にはどよめきが起こった。「嘉手納におけるスペシャル・オリンピックスは、900人のアスリートとその2倍近くのボランティアが集い米本土に次ぐ規模である。」との説明には、空自からも連合准曹会那覇支部の上級空曹を中心とする多くの隊員・家族が毎年ボランティアとして参加していることと相俟って、JAAGAとして引き続き同イベントを支援する意欲をかき立てられた。

続く質疑応答は時間の関係で4名のみとなったが、部隊運用、基地の特性、指揮統率、地元との関係、部隊間交流等の質問に対し、20分間に渡り、丁寧に答えられた。その中でも、沖縄の基地を巡る様々な議論についての「民主主義国として自由な発言が許され健全な議論が交わされている事は良い事であり、丁寧に我々の活動を説明していきたい。」との考えや、任務遂行上の留意事項として、本土を離れて緊張感の中で勤務する隊員・家族に心を砕いていることが、米空軍の指揮官と

しての気概を強く印象づけるものであった。

最後に Cornish 団司令から、研修団に対する謝意とともに、「皆さんの支援が大切であり、我々について理解してくれたことを皆さんからいろんな人に話してもらえるとありがたい。」旨の希望が述べられた。また宮脇正会員からお礼の言葉が述べられた。全体を通して、Cornish 団司令の任務に対する責任感、部下隊員に対する思い、地元沖縄・空自・日本に対する信頼と敬意が滲み出た、貴重な時間であった。

終了後庁舎前で、3本のポールにはためく日米両国の国旗、国連旗をバックに Cornish 団司令と研修団全員で記念写真を撮り、米軍車両で約15分の所にある宿舎「Shogun Inn」に移動し、チェックインの後、しばらく休憩した。

居室には、Cornish 団司令から各研修者宛の歓迎レターと記念のメダル、飲料水が置かれており、枕元の電話のディスプレイにも「Welcome, Dear ○○○○」と研修者への歓迎メッセージが表示されている等、ホスピタリティを感じた。備品はアイロンや家族で生活できるような台所用品まであり、歯磨き、ひげ剃り、ドライヤー、室内履き、寝間着といった個人で準備できるもの以外は殆ど揃っていた。ロビーの自販機が、スナック菓子は米ドル、飲み物は日本円仕様になっていたのは、日本にある米軍基地ならではの面白さであろう。

#### 18:30 ~ 2025 夕食懇親会(18:00 カクテル・ドリンク)

1750 宿舎ロビーに集合し、徒歩でオフィサーズ・クラブに向かった。既に会場内のオープン・バーは開設されており、カウンターに向かう列を経て各人思い思いの飲み物を片手に、米軍人、空自主要幹部を交えた話の輪が随所に広がり、徐々に打ち解けた雰囲気醸し出されてきた。

そして定刻の1830となり、JAAGAの藤田理事と18航空団広報局・局長代理の1st Lt. Angelica

Eppersonの司会進行により、JAAGA主催の夕食懇親会が始まった。まず、米軍参加者として18航空団8名(Cornish 団司令、副司令 Col. Christopher Amrhein、最先任上級曹長 CMSgt Charles Hoffman、運用群司令 Col. David Mineau、整備群司令 Col. Timothy Burke、任務支援群司令 Col. Debra Lovette、施設群司令 Col. Dwayne Robison、医療群司令 Col. James Lasswell)及び第353特殊作戦群司令 Col. William Freemanの計9名が、続いて空自参加者5名(荒木南混団司令、川波那覇基地司令、湯瀬南混団司令部幕僚



Satisfactory smiles with Brig. Gen. Cornish in front of 18th Wing HQ





Mr. Hata, JAAGA Tour Leader gives an opening speech as the host of friendship dinner at the Officers Club, Kadena AB



Brig. Gen. Cornish gives a speech on behalf of the attending Kadena Commanders

長、南混団准曹士先任荻野浩幸准空尉、9空団兼那覇基地准曹士先任小川和男准空尉)が、そして最後にJAAGA 主要メンバーとして、秦研修団長、西山研修副団長、平田理事、石津沖縄支部長、木村沖縄支部事務局長が紹介された。

引き続き、主催者を代表して秦研修団長から「私はマイクを使わない」と宣言した上で歓迎の挨拶があり、続いて米軍を代表して Cornish 団司令から「私はマイクを使う」と笑いを誘いながら、2月12日に那覇基地で行われたJAAGA 表彰式で表彰された日米隊員に言及しつつ、JAAGA の支援に対する謝意が述べられたとともに、「翌朝は装備品のみならず我が隊員達(Great Airmen)もよく見てほしい」との希望が表明された。

1850 過ぎからいよいよ食事の時間となった。とは言え、当日はビュッフェ・スタイルであり、ヘッド・テーブルから順番に各自お皿に料理を盛る手順となっていたので、最後のテーブルのグループが料理にありつけたのは1910頃となり、それまでにすっかり舌ならぬ鼻が肥えたようであった。カクテル・タイムから漂っていた打ち解けた雰囲気は食事とともに更に盛り上がり、各テーブルは賑やかで笑いが絶えず、何れの参加者も、話すか食べるかで、常に口が動いていた。

そして、雰囲気が高潮に達してきた2000頃、Cornish 団司令の配慮により、スペシャル・ゲストとして琉球大学・琉球芸能研究クラブのメンバー7名が三線、太鼓、琉球笛を手にとり登場した。彼らの多くは沖縄県外から入学し沖縄芸能に興味を持ち稽古に励んでいる学生である。一人ずつ出身県とともに紹介された後、沖縄の伝統的な曲から「島唄」等の比較的新しい曲まで4曲が歌い演奏された。オフィサーズ・クラブの従業員も、仕事の手を休め会場内の後ろの方で見学していた。4曲目の「おじー自慢のオリオンビール」が終わり、アンコールでもう1曲披露された後の2015頃、Cornish 団司令が飛び入りで、「先ほどの酒に関する曲だと思うが、秦研修団長と荒木南混団司令が完璧に歌詞を諳んじていたのは驚きだ」と笑いを呼んだ後、琉球大学のメンバーに感謝の意を伝え、全員の大拍手で学生達を見送った。

最後に理事を代表して平田理事が、JAAGA20周年に言及しつつ、琉球大学のゲスト、空自・米空軍の支援に対する感謝の言葉を述べ、2025 閉会した。賛助会員からは「こんなに中身の濃い研修とは思わなかった」との声も聞かれた。

その後も3分の2程度の会員・米軍人の有志は、オフィサーズ・クラブ内のバーに移動し、アメリカの雰囲気そのものの中で、懇親の場を楽しんだ。2035頃オフィサーズ・クラブ玄関前で、大勢のラフな姿の一群が大音量で音楽をかけ叫んでいるので、何かと尋ねてみると、「All Military Spouses Dining-In, Race」と、ニコニコしな

Brig. Gen. Cornish invites seven special guests from Ryukyu University, who play local music with Sanshin, drum and Okinawan transverse flute



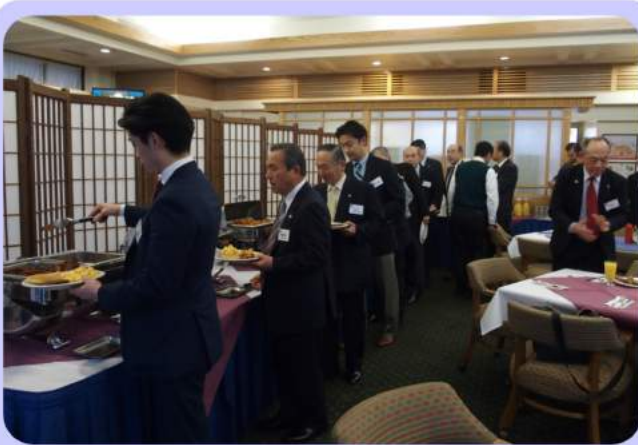
Brig. Gen. Cornish thanks the students for their superb performance



がら答えてくれた。軍人の配偶者が知力・体力を駆使したレースを行い、オフィサーズ・クラブにゴールするという、部隊団結を兼ねた粋な計らいらしい。2145にお開きにした後も遅くまで歌い飲んだ人がいるとの噂もあるが、JAAGAの関知するところではない。

### 【2日目(2月25日(水))】

0645に宿舎ロビーに集合し、米軍が用意してくれた荷物用トラックに貴重品以外を預け、0650、バスで朝食会場「Tee House」に向かった。0700の我々の到着とほぼ同じタイミングでフライト・スーツ姿のCornish団司令が合流し、飛行場が一部臨める開放的なホールでビュッフェ形式の朝食を摂った。自由席での1時間近いゆったりとした時間であり、離陸していくF-22を遠くに見る機会も得た。



Buffet style breakfast in "Tee House"

### 08:10 嘉手納基地研修(運用群司令ブリーフィング、航空機見学)

バスで空中給油部隊の講堂に移動し0810から、前日夕食を共にしたMineau運用群司令のブリーフィングを受けた。Cornish団司令も同席の下、運用群が所掌する任務、編成・装備、人員等について、「トモダチ作戦で



Col. David Mineau, Commander of 18th Operations Group, briefs energetically on operation



JAAGA tour members and 18th Wing crew officers with KC-135 and HH-60 in the background

は18航空団が空軍の中心的役割を果たした」等の実例を挙げながらの若々しさ溢れる話であった。部下指揮上の重視事項に関する質問に対して、隊員の生活のバランス、及び、各種制約がある中で任務を全うするため装備品を最新の状態で長期間使えるよう準備することが大切との考えが示された。また、空自パイロットの技量に関する質問に対する「平成21年に初めて沖縄で勤務して以降のみを見ても、格段に技量が向上している」との結論は、沖縄、訓練移転先、国外、それぞれにおける空自との共同訓練の場での自身の経験を論拠としており、説得力あるものだった。

0855頃から格納庫地区において、KC-135型空中給油機、HH-60型救難ヘリコプター、F-15型戦闘機の実機を、3グループに分かれて見学し、それぞれ中尉～大尉の搭乗員から説明を受けた。KC-135は機内の装備について丁寧な説明がなされ、腹ばいになってboom・オペレーターの体験をする人もいた。1機で自動車38年分の燃料を搭載できるとの例示は、いかにも米国らしい。HH-60は戦闘状況下で人員救助を行うため、機銃や自己防御装置を搭載しており、説明にあたった中隊唯一の女性パイロットは、数ヶ月先に実任務に派遣されると意気揚々と話してくれた。F-15はパイロットが行う外観点検の順序に沿って説明がなされた。操縦席左に描かれた2つの撃墜マーク(撃墜機種名入り)と動翼へのパッチ充て修理等から、実際に戦闘に参加した機体であることが読み取れた。

説明にあたる搭乗員の熱意もさることながら、研修者の質問も活発であった。

### 1030～1110 嘉手納基地→那覇基地

1時間弱の研修時間はあっという間に経ち、集合写真を撮った後1000頃、バスで司令部庁舎に移動し、出発準備を行った。Cornish団司令と記念撮影をする姿も多く見られた。空自バスに乗り換え1025頃那覇基地へ向け出発する際に、Cornish団司令がバスに乗り込み、「嘉手納に来てくれてありがとう。皆さんのご支援が大切



です」と重ねて我々に対する感謝と期待が表明されたことが印象的である。

### 1110～1245 那覇基地研修(施設部隊訓練見学、航空機見学)

那覇基地に到着後、当初の予定には無かった事であるが、部隊側の好意によって、当日始まった日米施設部隊の合同訓練を15分弱の短時間であったが見学することができた。訓練場に到着したバスの中で南混団装備部長鈴木武則1等空佐、Robison 第18施設群司令、南西航空施設隊司令長田司2等空佐から順次説明を受けた後、機動バリヤ(航空機着陸拘束装置)



Dropping in at Civil Engineer Groups' bilateral training site of mobile arresting barrier

の訓練状況を見学した。また、先日 JAAGA 表彰を受け Cornish 団司令からも前夜紹介のあった南施隊高間宗仁空曹長から、車中で挨拶があった。

1130 に食堂に到着し、研修団のみで那覇基地の金曜日メニューであるカレーを味わった。1215 までに、昼食、那覇基地最後の用便、土産購入を済ませなければならないため、各人かなり急いで食べたようである。

土産購入後は、基地の隊員がカウンターを設け、土産のビニール袋の口をテープで止め、マジックで名前を書き、容易に識別できるよう措置してくれた。

そしていよいよ最後の研修。バスで飛行格納庫に移動



Each JAAGA Tour member bolts “every-Friday-Curry lunch” at the Naha mess hall



JAAGA Tour members and JASDF Commanders in Naha AB with F-15, just a few minutes before boarding C-1 to Iruma

し、荒木南混団司令、川波基地司令の出迎え・立会の下、9空団飛行群司令徳重広為智1等空佐の説明を受けつつ、204飛行隊のF-15を見学した。最後に機体をバックに全員で記念写真を撮り、全ての研修日程が終了し、荒木南混団司令、川波基地司令の見送りを受けて、バスで帰りの機体へと向かった。

### 1305 那覇基地発 15:30 入間基地着

那覇基地を離れる直前まで航空機見学ができたのは、偏に空自側の配慮による。搭乗手続きをバスの車内で行い、その間にバスの荷物室に収めてある各人の荷物を、係の隊員がバスからC-1に向かう動線に沿って一列に並べてくれていた。F-15を見学した何と5分後には、全員がC-1に搭乗完了していた。そして、それら一連の行動を、千秋南混団総務部長が、最後まで見届けてくれていた。

1305 那覇基地を飛び立ち、1530 入間基地に到着。出発時と同様、平本中空司令官、山本基地司令、高垣2輪空隊司令の出迎え、同席を得て、1545 から入間空輸ターミナル内で解団式が行われた。秦研修団長、西山研修副団長から所見、平田理事から挨拶がそれぞれ手短に行われた。西山副団長の「皆さんと楽しくやれた。米軍基地の大きさに驚き、部隊指揮官と話し、JAAGA に対する期待が大きいことが分かった。今後も JAAGA の一員として日米友好に努めていきたい」との所感は、おそらく参加者全員が共有するものであろう。

本研修の全日程を無事に終了し、再び入間基地の車両支援を受け、1555 空輸ターミナルを出発し、1600 稲荷山門にて私有車組は流れ解散、電車組は 1605 稲荷山公園駅にて解散し、それぞれ家路についた。雪はなくなっていた。

(木村(和)理事記)

※ 賛助会員5名の方の研修所感文をJAAGAホームページ(<http://www.jaaga.jp/>)に掲載しています。



## 第 374 空輸航空団司令にモス空軍大佐が着任 The 374 Airlift Wing welcomes Col. Kenneth E. Moss as New Commander

6月24日(金)、横田基地において在日米軍司令官兼第5空軍司令官ドーラン中将(Lt. Gen. John L. Dolan)の主宰により、第374空輸航空団司令(兼米空軍横田基地司令)交代式が行われ、デラマター大佐(Col. Douglas C. DeLaMater)からモス大佐(Col. Kenneth E. Moss)に指揮権が継承された。来賓として、周辺自治体、協力団体、官公署、北関東防衛局の長等、及び航空自衛隊から航空総隊司令官福江広明空将夫妻をはじめとする総隊の主要幹部、近隣部隊長、基地司令等が招かれ、JAAGAからは、森下副会長、石野、阪東、谷井、岩本、藤田、木村(和)の各理事及び石川会員が参列し、荘厳な式典を見守った。

格納庫内の会場には、大きな日米両国国旗が掲げられたステージを正面にして、来賓席、第374空輸航空団の隊列、基地所在部隊等隊員席スタンドが順に配置され、傍らには軽音楽バンドが控え、開け放たれた先の駐機場には、米空軍、空自、陸自等の航空機が展示されていた。

式典は1030から開始され、指揮官交代式の意義(荘厳な軍のセレモニーであり、指揮権移譲を目に見える形で行うことにより、隷下の軍人が新指揮官が指揮権を引き継ぐ瞬間を見とどける)、主賓入場、国旗掲揚、国歌斉唱(日米それぞれの隊員による独唱)、第374空輸航空団隊列確認(ドーラン中将が掌握)、祈り、ドーラン中将の挨拶、離任するデラマター大佐の挨拶(部隊からの最後の敬礼を受礼)、指揮官交代(指揮官旗がデラマター大佐の手からドーラン中将を経てモス大佐の手に)、新たな第374空輸航空団司令モス大佐の挨拶(部隊から最初の敬礼を受礼、その後直ちにエプロンのC-130指揮官機にモス大佐の名前を刻印)、空軍歌斉唱、主賓退場の次第に沿って、約45分間に亘って整齐と行われた。

ドーラン司令官の挨拶で、デラマター大佐については、ネパール大地震、熊本地震、クリスマス・ドロップ作戦等における功績や、この度退役し米本土でC-130シミュレーター教官として文官の立場で軍の任務に就く旨、モス大佐については、勤務歴とともに、リーダーとしての活躍を確信している旨紹介された。

離任・退役にあたりデラマター大佐からは、第35戦闘航空団(三沢)司令サンドバル大佐のF-16や空自・陸自の航空機が自身の眼前に駐機してあること



は力強いパートナーシップの証であること、及び普段の任務遂行から本日の会場設営に至るまでの多くの出来事を挙げながら団の隊員の私心無き貢献に対する感謝の数々等、わき上がる思いが披露され、そして、日本語で「日本の皆様は私たちの家族です。どうもありがとうございました。」

と述べられた。

新団司令モス大佐からは、日本語の挨拶を織り交ぜながら、「PACAF(太平洋空軍)最高の航空団の指揮官に選ばれたことは人生における名誉である。」として、今後



Col. Kenneth E. Moss



(↑)The 374th Airlift Wing guidon is placed from Col. DeLaMater through Lt. Gen. Dolan, then to Col. Moss during the Change of Command ceremony

(←)JAAGA Chairman Morishita bids a fond farewell to Col. DeLaMater after his retirement ceremony

(↓)JAAGA officers start new relationship of friendship and mutual respect with Col. Moss and his family





の決意が表明された。

式典の最後の空軍歌斉唱では、拳に力を込めて振り上げる主賓3名の姿が印象的であった。

なお、式典に先立ち、デラマター大佐の退官式が将校クラブで行われ、森下副会長がJAAGAを代表して参列し、労をねぎらい、同大佐からはJAAGAへの謝意が表

明された。

また、式典後、モス大佐夫妻主催のレセプションが将校クラブで開催された。前任者からの申し送りによってモス大佐はJAAGAの存在を知っており、JAAGA参列者は短時間の挨拶ではあったが、ご子息を交えて歓談し、良き新たな関係のスタートを切った。(木村(和)理事記)

## 第35 戦闘航空団司令ティモシー・サンドバル空軍大佐送別会 Farewell Party for Col. Timothy J. Sundvall, Commander of 35th FW

第35 戦闘航空団司令兼米空軍三沢基地司令ティモシー・サンドバル大佐 (Col. Timothy Sundvall) の送別会が7月1日(金)18:00～20:00 米軍三沢基地下士官クラブ・ボール・ルームにおいて、三沢市長はじめ三沢市内コミュニティーのリーダー、在三沢米空軍、米海軍関係者及び空自三沢基地司令等約200名が参加して盛大に行われた。

当日の服装はカジュアルな服装での送別会であり、出席者の皆さんは大変リラックスした中での開催となった。サンドバル大佐は平成26年6月の着任であり、三沢基地司令として約2年間の勤務を終える予定である。送別会において、在三沢の部隊隊員から記念品等が手渡され、感慨深く記念品を受領した。最後のサンドバル大佐の挨拶では、第35 戦闘航空団をより精強に育ててくれた前任下士官及び各群司令並びに隊員たちへ感謝の言葉を述べると共に、三沢市長をはじめ三沢コミュニティー

の各リーダーの方々へ「三沢基地隊員を温かく三沢コミュニティーに受け入れていただき、また、友好関係を築くことができたことに対して大変感謝しております。」との言葉が述べられた。JAAGAからは山本事務局長夫妻が出席した。

サンドバル大佐は、指揮権交代後、次任地のペンタゴンJ3(統合参謀事務局、作戦部門)勤務とのことである。

(山本三沢支部事務局長記)



Col. Sundvall and his wife with satisfaction at his farewell party

## 第35 戦闘航空団司令にスコット・ジョーブ空軍大佐が着任 35th FW welcomes Col. R. Scott Jobe as New Commander



Col. R. Scott Jobe

第35 戦闘航空団司令(兼米空軍三沢基地司令)交代式が7月7日(木)米軍格納庫949で、第5空軍司令官ドーラン中将(Lt. Gen. John L. Dolan)により執り行われた。式は、北部航空音楽隊の支援と国家独唱等により粛々と執り行われ、ティモシー・サンドバル大佐 (Col. Timothy Sundvall) からスコット・ジョーブ大佐 (Col. R. Scott Jobe) へ指揮権と共に第35 戦闘航空団の伝統も引き継がれた。式には、三沢市長をはじめ関係団体等長及び北部航空方面隊司令官城殿空将他在三沢各部隊長等多数が出席した。JAAGAからは、山本三沢事務局長夫妻が出席した。

式終了後、東北クラブボールルームにおいて、スコット・

ジョーブ大佐の歓迎会があり招待者等と歓談し交流を深めていた。

(山本三沢支部事務局長記)



(from left) Lt. Gen. Dolan, Col. Sundvall and Col. Jobe at the Change of Command ceremony



## 米空軍交換将校だより Present circumstances of "Officer Exchange Program between JASDF and USAF"

航空自衛隊幹部学校 教育部作戦教官室  
スティーブン・ローズ中佐 (Lt Col Steven M. Rose)

私、スティーブン・ローズ中佐は、2014年5月より航空自衛隊幹部学校で教官として勤務しています。幹部普通課程(SOC)、指揮幕僚課程(CSC)、幹部高級課程(AWC)及び統合幕僚学校の学生教育を受け持っています。また、航空支援隊並びにF-15及びF-2の戦技課程でも特別授業を実施させていただきました。

私は、米空軍で情報幹部として18年間勤務しており、その間、ターゲティング及び特殊作戦にも携わりました。また、ボスニア、セルビア及びイラク(2回)等に派遣され、米軍が実施する作戦に参加しました。私は、これらの経験を活かした授業を実施しており、学生は私の授業を通じて米空軍の作戦を学んでいます。

私の妻は岐阜県出身で、2人の娘がいます。子供たちは日本のモデル会社数社と契約しており、子供向け雑誌でモデルとして活躍しています。現在、私と家族は東京都目黒区に住んでいます。私は、幹部学校勤務後、在韓米軍司令部で1年間勤務予定で、その間家族は、日本に残る予定です。

私は、幹部学校での勤務を非常に楽しんでいます。特に、学生との対話、米空軍の文化や統合作戦について

教育することにやりがいを感じています。学生の学習意欲にはいつも圧倒されます。私は、このような意見交換の場やそれぞれの軍における計画立案のプロセスの文化の違いについて学ぶ機会が今後も継続することを望んでいます。そして、我々の同盟関係がさらに強化され、アジア太平洋地域における抑止力が強固なものになることを期待しています。

幹部学校の勤務の中で特に印象に残ったのは、幹部学校で実施された演習(CSC課程の応用研究)に参加したことです。航空図等の紙の地図を使用した図上演習ではありましたが、将来航空作戦を立案する幹部を育て、航空自衛隊で実施する演習の予行として、大変よい教育であったと思っています。私は、あらゆる場面において、準備と計画立案のプロセスは勝利への近道と信じています。私の好きな言葉に、アイゼンハワー大将の「計画そのものは無用だが、計画立案のプロセスは絶対に必要だ」という言葉があります。私の教え子たちは「計画立案において『アート』と『サイエンス』は異なるものである」という教えずっと覚えていてくれることと思います。

私は、課業時間外を利用して、学生の論文の支援や英語教育を実施しました。日本文化を満喫する機会も多数ありました。特に草津温泉と郡上温泉が好きです。私は、ニューヨーク州の山に囲まれた地域出身のため、日本アルプスも好きです。子供たちは、岐阜にあるかがみはら航空宇宙科学博物館に行くのが好きです。退官した自衛官が親切に対応して下さり、紙飛行機の飛ばし方を教えてくれました。

子供たちは幼いので、ディズニーランドによく遊びに行きますが、子供たちは上野科学博物館や上野動物園に行くのも好きです。東京は、多くの公園、寺、緑があり、世界で最も住みやすい街だと思っています。

私は、韓国での勤務終了後、日本に戻ってくるか太平洋空軍で勤務することを希望しています。米空軍と航空自衛隊の関係がさらに深化し、両国の「平和な蒼い空」がずっと続くことを願っています。『今後ともよろしく願います。』



Lt Col Steven M. Rose



CSC class of Combined Air Operations



Lt Col Rose's daughters, Isla ,Clala



## 第1輸送航空隊飛行群第401飛行隊 ジャック・ビーン少佐 (Maj. Jack E. Beene)

初めまして、私は2013年の冬から航空自衛隊小牧基地の第1輸送航空隊飛行群第401飛行隊でC-130の教官操縦士として勤務しているジャック・ビーン少佐です。タックネームは“雷電”です。名前の由来はまたの機会にとっておきます。

米空軍に入隊してからはC-130輸送機の整備士として10年間働いた後、2001年に幹部候補生として4ヶ月の訓練を受けました。卒業後コロンバス米空軍基地でSUPT(基本操縦課程)のT-37型機により飛行訓練を行い、その後NASコーパスクリスティ海軍基地でT-44型機により飛行訓練を修了し、操縦士としての資格を取得しました。基本操縦課程修了後、リトルロック空軍基地でC-130輸送機の基本課程を修了しました。

初めて配属されたドイツのラムスタイン空軍基地ではアフガニスタンやイラクへの展開をはじめ3年間の赴任中に約25か国への飛行を経験しました。様々な国の習慣や文化にふれることにより、以前から私のゴールであった小牧基地への交換幹部候補生への夢がますます強くなりました。それは以前、整備士として働いていた時に小牧基地で米空軍第36飛行隊と第401飛行隊の交流に参加する機会がありました。自衛隊の方々と一日を共にして、もし日本で仕事をする機会があればかならずその機会を得ようと決心しました。私にとって交換幹部候補生への道のりは簡単なものではありませんでしたが、候補生に選ばれたときはとても嬉しかったです。交換将校業務の準備としてカリフォルニア州の米国防総省の外国語学校で日本語を1年半学びました。今でも日本語は堪能ではありませんが、職場の方々の理解と協力もあり小牧基地での勤務も2年3ヶ月が過ぎました。

13年間、私は横田基地での勤務経験はありましたが、小牧基地に配属され、航空自衛隊の習慣を一から学ばなければなりません。最初は戸惑うことも多く言葉の壁から職場の方々にご迷惑をかけたかと思えます。そんな私を温かく迎え入れ適切なアドバイスを下さりとても感謝しています。

約2年間の勤務の中で一番印象強いのが昨年12月に行われた”Operation Christmas Drop”(OCD)です。この訓練を実現するまでには多くの自衛隊、米空軍の方々の協力のうえで実現されました。この訓練は米空軍が毎年12月にグアムで70年間近く行っている訓練

です。昨年は、はじめて日米豪3か国共同での訓練を実現することができました。

この訓練を実現するまでの様々な困難を乗り越えて、C-130輸送機から最初の荷物が投下されたときはとても嬉しかったです。

付け加えて、私は、仕事以外でも妻の真理子と子供2人と共に、多くの良き思い出をつくることができました。日本に滞在し、大阪のUSJや三重県の伊勢神宮参拝等、日本でしか経験できない独特な機会を得ることができたのは、本当に楽しい思い出になりました。



Major Jack E. Beene



Gifu AB Grass Landing (intentionally)



Maj Beene and longtime mentor



Operation Christmas Drops after first day



～ Special contribution of the 20th anniversary of JAAGA ～

**JAAGA 創立 20 周年特別寄稿**  
**JAAGA 第 2 代会長 鈴木昭雄**  
**Gen. Akio Suzuki (Ret.)**  
 The 2nd President of JAAGA



**“GOOD WILL” の絆を称えて**

“継続は力なり”。JAAGA が 20 周年を迎えたこと、これまでの多くの関係者とともに心から祝福したい。創設の頃をふり返って初心を語ることにする。

OB になってまずやらねばと思っていたことがあった。それは、海自と在日米海軍の緊密化をサポートする、海自 OB による JANAF A の活発な活動を目にして、空自にも同じ様な組織を作ることであった。その理由は、在日米軍司令官が空軍なのに、空自が何もしなくていいのかという率直な思いにあった。石川(防3)OB も同じ思いを持っていた。思えば、川重の顧問室で一緒に吉田元海幕長の賛同を得て、JANAF A の創設に関する資料を提供してもらい、石川、坂本(防8)両 OB の努力によってその外貌が明らかになってきた時、当時の第5空軍司令官であったマイヤーズ中將から、会の名称は“FRIENDSHIP”よりも“GOOD WILL”のほうが善いと助言があった。確かに、“WILL”の方が意欲的であるし英語の響きもいい、また、在日米空軍もこの創設にかかわったことにもなる、象徴になるいい名前を貰ったと喜んだものである。承知のように平成8年7月、エバハート大將(Edさん)が第五空軍司令官の時に、さらに強い賛同を得て JAAGA は発足した。この象徴となる言葉“GOOD WILL”を合言葉に、JAAGA は、この20年ひたすら善意をもって意欲的に米空軍に接し、米空軍もこれに善意で応え日米両空軍の絆を一段と深めてきている。その輝かしい足跡は、これまでの“JAAGA だより”の毎号にすべてが力強く記されていて、創設を志した一人としてまことに喜ばしい限りである。去る空自60周年を迎えた秋に JAAGA 訪米団に合わせてワシントンを訪れ、米空軍とEdさんへ感謝の意を伝えるに行った時のEdさんはじめ多くの名誉会員の笑顔に、日米相互の GOOD WILL による強い絆を感じる事が出来て本当に嬉しかった。その時の米側によるコメントには、必ず空自との絆の強さを称え JAAGA の活動と訪米団継続の努力を高く評価していた。なかでも、前空軍参謀総長シュワルツ大將が、「米空軍は、世界各国の多くの空軍とも親しくお付き合いをしているが、いちばん仲が良いのは空自である」と語ってくれたし、Edさんも、「JAAGA を立ち上げたことに強い誇りをもってよい。日米両空軍にとっても、日米両国にとっても本当によいことであったと思う」と。さらに、同席した佐々江駐米大使が、JAAGA を柱とする日米両空軍の友好親善の活動が、一期生の時から続いていることへの驚きとその努力を心から称えておられたことなどである。これらの言動に、これまでの JAAGA の活動が立派に報われつつあるなど満足して聞いていた。その活動の一つ訪米団についても触れておこう。最初の訪米団は、平成二年、同期の二宮 OB の発案で米川元空幕長が団長に

なり、つばさ会の名を冠して実施されたと聞く。私が OB になった時に本格的な取り組みを始めて、二宮 OB が各社に協力をよびかけるなど参加者も8名前後になって、空軍のみならず陸軍や海軍や海兵隊の基地にも訪問した。実施にあたっては、最初は米側との調整にいろいろ苦労があったと聞くが、いつも背後からデビス大將(JB)やEdさんの強力なサポートがあって、ほぼこちらの希望どおりに実施することができた。当初からEdさんは、JAAGA での縁を大事にされて空軍副参謀総長、戦術空軍司令官、宇宙空軍司令官の時に、いつも心温まる歓迎でわれわれを迎えてくれた。なかでも、ラングレー基地を訪れたとき、前夜の豪雨で辺り一面が水浸しになりこれではゴルフは駄目だと思っていたら、ニヤリと笑い近辺の一番標高が高いゴルフ場を予約してあるという、その底抜けの GOOD WILL に、一同感動のあまり感謝の言葉がなかったことを思い出す。Edさんの GOOD WILL は、今のワシントンでの名誉会員による温かい受け皿になっているものと思う。なにか、深い、温かい、ひたむきの善意が感じられてならない。

この GOOD WILL については、佐々江駐米大使も非常に良い言葉を使っていると褒めておられたので、実はマイヤーズ大將の助言ですと申し上げたら“なるほど”と納得されていた。深く尋ねてはいないが、われわれが思う以上に深い愛の心のこもった言葉で、原点は、キリストの“愛”から来るものなのであろうか。この心、東洋では孔子の教える“仁”であり、釈迦の教える“慈悲”でもあり、見返りを求めないひたむきの善意と、私はとらえている。JAAGA の活動の根本精神は、この“GOOD WILL”にある。これまでもそうであったし、これから日米両空軍が、相互に“GOOD WILL”の絆がぐちりと結ばれて行くことを心から期待してやまない。



at Residence of Gen. Eberhart (Ret.)  
14 Sep. 2014



~ Special contribution of the 20th anniversary of JAAGA ~

**JAAGA 創立 20 周年特別寄稿**  
**前駐米大使 藤崎一郎**  
**Mr. Ichirou Fujisaki**  
 Former Japanese Ambassador to the U.S.



**ワシントンのジャガ**

「尾崎一佐、入りますっ。今度ジャガがまいります。よろしく  
 お願いします」空の防衛駐在官が大使室に入ってきた。

防衛駐在官が入ってくるときはすぐわかる。背広のときでも入



り口で姿勢よく起立して申告  
 する。すがすがしい。にわか将  
 官になった気分になれる。文  
 官はたいていの場合、てれて  
 れ入ってきて机のそばまで来  
 てから「あの一、ちょっといいで  
 すか」と来る。何省出身でもあ  
 まり変わりはない。もっとも私も  
 若い頃から文官としてずっと  
 同じようにてれてれやってきた  
 からけっして文句は言えない。

「ジャガ、なんじゃそりや、猛獣  
 か英国車か知らないが空自となんの関係があるんだ」と思っ  
 た。しかしこちらも官僚生活40年である。伊達に飯は食って  
 来ていない。「一体なんのこただ」なんて聞かない。「ん、ソファ  
 で説明を聞こうか」とおもむるに着席を促す。

「大使よくご存知のとおり空自 OB で日米関係に携わっ  
 た将官がつくっているジャガ (JAAGA)」という団体が、今度  
 週末にワシントンに来ます。遠竹元空幕長が団長で大使に  
 よろしくとのことです。エバハート元大將がパーティーをしてく  
 ださいます」。

「そうか、あの JAAGA がやって来るのか。遠竹さんならよ  
 く存じ上げている。お時間があるなら食事会でもやろう。」

旧知の元空自幹部の方々が来られ、公邸で昔話に花を咲  
 かせた。さらには翌日の夕刻、エバハート元大將の自宅での  
 パーベキューにも夫婦で参加した。同氏は在日米軍司令官  
 もつとめ、米空軍きっての日本好きである。深い緑の森に囲  
 まれた別荘のような家の中は日本の思い出  
 の品でいっぱいである。奥の居間の中央に  
 ひかえるのはエバハート氏ご自慢の50セン  
 チもあろうという茶色の巨大な将棋の駒であ  
 る。王将でなく大將と書いてある。書を能くす  
 る遠竹さんが山形の天童で特注し、自ら筆を  
 執ったと聞いた。

やはり在日米軍司令官経験者のマイヤ  
 ズ元統合参謀本部議長夫妻ほかの日本関  
 係者も加わった。話題の中心は昼間行われ  
 た両国 OB の対抗ゴルフである。エバハート

氏はハンディがシングル級とのこと。米軍の中でもゴルフとい  
 うと空軍ということになる。「なぜなの、飛ぶものが好きだから  
 かい」と米海軍の友人に聞いたことがある。「違うよ、我々は  
 ふだん海の上だし、陸軍や海兵隊は、しょっちゅう行進訓練  
 させられていて、歩くのにうんざりしているんだ。空軍の連中  
 ときたら、飛行機から降りたら地上では他にになにもすること  
 がないからだよ」との返事が返ってきた。もちろん出来の悪いジョ  
 クである。

緑につつまれ、陽光のもと、ビールを飲みながら、冗談をと  
 ばしつつ楽しそうにゆっくりくつろぐ日米の空の元将官たち  
 には、かつて勇猛果敢と言われた面影はなかった。壮絶な任  
 務を果たした満足感、懐旧の想いが共通しているようだった。  
 武人の間には国境を越えて濃いつながりがある。残念ながら  
 同様に国益を背負う外交官同士にはそういう関係はない。  
 仲間意識が OB になっても続いているなんてじつにうらやまし  
 い。いいなあ。

外衛前会長、岩崎新会長はじめ皆様、JAAGA20周年、  
 本当におめでとうございます。



at Ambassador Fujisaki's residence



Signing Ceremony (Gen. Myers & Eberhart)  
 "United States Military in Japan Alumni Association"  
 in May 2015



~ Special contribution of the 20th anniversary of JAAGA ~

**JAAGA 創立 20 周年特別寄稿**  
**JAAGA 前理事 高橋健二**  
**Col. Kenji Takahashi (Ret.)**  
 Former JAAGA Director



## JAAGAの思い出

日米エアフォース友好協会 (JAAGA) が今年で創立 20 周年を迎えた。早いもので、理事として協会の運営に参画して 12 年、この間、広報、財務そして渉外理事として活動し、協会のほぼ全ての行事に参画できたことは得難い経験であった。



with Cadets as a host family

特に、印象に残っていることは、JAAGA を通じて依頼があり、統幕学校のタイ留学生 P 大佐と防衛大学の米国留学生 S 候補生のホストファミリーを引き受けたことであった。それぞれ、年度は違っていたが、家族と一緒に、食事をしたり、多摩川の花火を観たり、観艦式に乗船したり、防大の開校祭に招待を受けたりして、共に楽しい時間を共有することができた。



at Nikko Toshogu

また、宇都宮在住の T ご夫妻の案内で、米軍人夫妻たちと一緒に神橋を渡り、東照宮で巫女舞を鑑賞したり、窯元を訪れ陶器の湯のみ茶碗を作ったりして、米軍人夫妻共々、日

本の文化を楽しみ、有意義な時間を過ごすことができた。

米軍横田基地で毎年5月に開催される関東スペシャル・オリンピックスの行事に数度参加した。この行事は E 先輩が中心になって、この行事への支援を決めた経緯があり、当初賛同を得るのが難しかったと記憶している。日米軍人たちが行事と一緒に参加し活動している姿を見てもこの行事に参加して良かったと思う。また、この行事が現ケネディ駐日大使の父の妹であるユニス・ケネディ・シュライバーが提唱者であることも印象的である。



Special Olympics at Yokota AB

入会当初は協会の事務室もなく(住所は私書箱)、役員会や理事会等は会社の会議室を借りたり、グラントヒル市ヶ谷の別館の控室等を借りたりして苦勞して実施していた。今では、協会の事務室も完備し、役員会もホテルの一室を借りて実施している。年に3回発刊していた、広報誌はいつも役員会終了後、全員で配送業務をやっていた。現在は年2回の「JAAGA だより」は業者委託にして全員で配送する作業はなくなったが、Y 理事が中心に内容の充実が図られ、カラーの立派な広報誌になった。新たに、時代の流れで HP を開設し、Y 先輩が HP による広報を担当している。この HP はとても好評である。協会のメインの行事である日米表彰式は長い間、米軍の行事の中で実施していたが、同期生の K 君が中心になり、予算を大幅に増やし、現行のように独自で空自基地において表彰式が実施できるようになった。また、財務の健全化のため、これも同期の K 君が毎年未納会員に対し「当協会は会員の皆様の温かい会費によって運営されて云々」の粘り強いお願いを実施したおかげで会費の納入率が大幅にアップした。

日米同盟の絆は日増しに進化し、JAAGA の役割は今後さらに大きくなるであろう。私も創立20年の機会に理事を退任するが JAAGA のさらなる発展を後輩たちに期待している。



~ Special contribution of the 20th anniversary of JAAGA ~

**JAAGA 創立 20 周年特別寄稿**  
**JAAGA 理事長 小野田 治**  
**Lt.Gen. Osamu Onoda (Ret.)**  
 Chairman of JAAGA Board

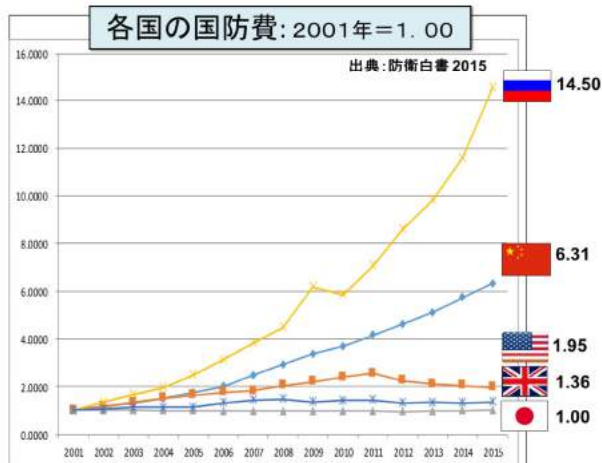


## 新たな局面を迎える日米安全保障協力

### 1 はじめに

1991年にソ連が崩壊したことを端緒に現在までの約25年間に、世界及びアジア太平洋地域の安全保障環境は劇的な変化を遂げた。力を背景とした連邦が解散し、ソ連の強大な軍事力は一気に弱体化した。その影響を受けたのは西側諸国だけではなく、国境を接する中国と北朝鮮にも大きな影響を与えた。ソ連崩壊に先立つこと約10年、中国の実権を鄧小平が握り改革開放路線に転換したことが、地域の戦略環境変化の第二の端緒となった。発展途上国中国が、沿岸線の防御から近海、遠洋へと防衛線を遠方に拡大していく戦略を描いたのは1980年代のことだ。それから35年、中国のGDPは1980年に約3千億ドルに過ぎなかったが、2015年には37倍の約11兆ドルへと増加した。同期間の日本のGDP増加率は3.8倍、米国は6.2倍である。ストックホルム国際平和研究所(SIPRI)によれば、1992年と2014年の国防費比較は、日本が1.16倍、米国が2倍であるのに対して、中国は19.3倍に上る。2015年の国防費は、日本が409億ドル、米は5,960億ドル、中国は日本の約5倍、2,150億ドルに上っている。

列強に侵食された屈辱の歴史を挽回し、「中国民族の偉大な復興」によって大国としての地位獲得を唱える習近平の言



葉にみられるとおり、経済力と軍事力の急速な増大は中国に大きな自信を与えた。残念なことにその自信は、他を顧みない自国利益の拡大に向かっているように見える。国際法を無視した領有権の主張、係争地域における原油や天然ガスなどの海底資源の一方的な開発、漁業権の一方的な拡大、人工島の建設と軍事基地化など、東シナ海、南シナ海で繰り広げられている中国の強圧的な行動に周辺諸国は懸念を深めつつある。

朝鮮半島においては、ソ連崩壊以降中国の支援の下にあ

る北朝鮮が、核兵器によって自国の安全保障を図る先軍的かつ強権独裁政治によって地域の不安定要因となるに至っている。弱体な経済力にもかかわらず、北朝鮮の弾道ミサイルと核兵器開発は着実に進展し、米国本土が北朝鮮の核弾頭の脅威下に晒される日が遠からず到来すると見られている。

本論は、こうした厳しい環境下、アジアへのリバランス戦略を唱える米国の安全保障戦略によって引き続き地域の安定を維持することができるのか、地域のリーダー的存在である我が国はどのように地域の安定に貢献すべきなのか、我が国が取り組むべき努力を考察するものである。



### 2 パワーバランスの変化と地域におけるパワーの空白化

ソ連崩壊によって生じた軍事的パワーの空白は、世界に緊張緩和と民主化を促進すると期待されたが、結果は統治の弱体化と内戦、新たな専制体制の台頭を産み世界を不安定な状況に陥れている。こうした状況にもかかわらず、日米及びEU諸国は経済の低迷と財政状況の悪化によって国防費の削減を迫られてきた。その間隙を縫ってNATOの東方拡大に脅威を覚えるロシアは、クリミア半島を力で奪取するとともに、ウクライナのNATO加盟を阻止するため武力による干渉に出た。チュニジアで発生したジャスミン革命は既存の専制体制を倒し、さらに近隣諸国にも伝搬したが、各国ともに統治は混乱し内戦状態に陥っている。シリアの内戦、イラク政府の混乱を縫うようにしてイスラム国が台頭し、混沌とした戦争状態に陥っている。イランは地域の秩序を我に有利にするために弾道ミサイルや核兵器開発に踏み出した。中東を起点とするテロリズムは欧州などに拡散しつつある。こうした劇的ともいえる安全保障環境の変化は、地域におけるパワーバランスの変化が根本的な原因の一つである。

アジアにおいては、米国が中東などで10年以上に及ぶ消耗戦を強いられている隙に、中国パワーが地域を席卷しつつ



ある。1982年に海軍司令員の劉華清は海軍近代化計画として「近海防衛戦略」を打ち出したが、その後の中国の海軍増強は、急伸する経済力を背景に劉華清が描いたとおりの能力を整備しつつある。同計画の最終目標は2040年を目途に、米国に拮抗する海軍力を建設することにある。南シナ海で起きている様々な事象は、ソ連が不在となり米国がフィリピンから撤退した後の力の空白を、新興パワーの中国が自らの勢力下に収めつつあることを意味している。東シナ海を含む我が国周辺でも中国の進出は目覚ましい。日中間線付近の中国ガス田は短期間のうちに16基に増えた。尖閣諸島領海への中国公船の侵入は月に2回程度の頻度に定常化し、最近では攻撃力を増した艦載砲搭載の海警大型艦艇が出没している。中国漁船の活動2013年11月の防空識別圏設定以降の中国航空機の活動は、活動範囲、機種、任務内容、機数ともに拡大の一途であり、爆撃機、警戒管制機、情報収集機などが第1列島線を越えて日本海や太平洋へと広がっている。中国領海の外縁を飛行する自衛隊機や米軍機に対して、中国戦闘機が挑発的で危険な接近飛行が度々行われている。北東アジアにおける日米韓の防衛努力は、厳しい財政状況ながらも着実に強化が図られ、力の空白というまでにはないと考えられるが、中国及び北朝鮮の強圧的かつ挑戦的な行動を必ずしも抑止するに至っていないのは、彼我の相対的な軍事力ギャップに変化が生じていることによるものと認識すべきである。

#### 平成27年度緊急発進実施状況

##### 緊急発進の対象となったロシア機及び中国機の飛行パターン例



冷戦後27年を経て今日のような安全保障環境に直面している最大の理由は、ソ連崩壊によって生じた力の空白を埋めることができないまま推移していること、米国一極による国際秩序維持の困難化していることである。米国の著名な識者達が、「米国は衰退しているわけではない」と主張するが、力を「能力×意志」と定義すれば、仮に能力が維持されていても、オバマ大統領が2013年に中東の混乱に対して「米国はもはや世界の警察官ではない」と宣言したことによって、世界各地に「意志の空白＝力の空白」を作ってしまったと考えることができる。

### 3 求められる同盟及びパートナーの連携強化

中国の強大化、ロシアの復活、イランや北朝鮮の挑戦、テロリズムやサイバー攻撃の拡散といった困難な安全保障環境を

改善して安定化を高めるために必要なことは何か。世界を圧倒する米国の政治・経済・軍事力が期待できない今日および将来において、米国を基幹としつつ、米国との同盟関係を強化し、価値観を同じくするパートナー国との協力関係を深めていくことが不可欠である。にもかかわらず実際には、中東、欧州、アジアでの米国の動きに、世界秩序を立て直す強い意志が見られないことが、さらに状況を不透明にしている。

QDR、戦略ガイダンス、各軍の戦略及び運用構想など、近年の米国政府の各種戦略文書に見られる大きな特徴は、同盟国及びパートナー国との役割分担と連携の強化をより一層重視している点にある。もちろん、中国やロシアなどの強力な競争相手の猛追に警句を発してはいるものの、軍事費削減圧力に悲鳴を上げて同盟国などに助けを求めているわけではない。米国が依然として世界に競うものがないスーパー・パワーであるとしても、我々が現在直面しているテロや大量破壊兵器の拡散、非国家主体の跳梁、国際法への非軍事的な挑戦、サイバー空間での犯罪的活動といった脅威に、圧倒的かつ先進的な軍事力で対処することは難しいということを示している。



従って我が国が第1に取り組むべきは、各国が脅威やリスクに対処する一定の力を整備するために協力と連携を深めていくことである。コンピュータ・ネットワークは脆弱なところが1か所でもあれば、そこからウィルスが侵入しシステム全体に広がっていく。イスラム国がシリアやイラクなどで版図を拡げていく様を見ると、まさにコンピュータ・ウィルスのように弱いところから破れが広がっていくのだということが良くわかる。アジア太平洋諸国は未だ発展途上で自国の安全保障に必要なインフラなどが未整備な国が多い。中国ただ一国が急速に力を強化化させる中であって、例えば各国が担うべき海洋安全保障などに関する欠落点が露見しつつある。日米が地域諸国と協力して欠落を丁寧に埋めていくことが必要である。フィリピンやベトナムへの巡視艇供与、様々な分野での人材育成支援、軍事・非軍事の共同訓練などの地道な協力が、国家間の信頼を高め、脆弱点を補っていくことに大いに寄与するだろう。日本が行い得ることは多いが、従来のように軍事面は米国任せ、日本は非軍事面に徹するというのでは不十分かつ非効率である。アジア諸国を侵略した負の歴史ゆえに軍事力を「自衛力」と言い換えるなど、憲法上の制約やタブーが多い我が国だが、現在の安全保障環境において、それらは逆に脆弱点となりか



ねない。この意味で平和安全法制や装備輸出三原則の制定は大きな意義を持つものである。地域諸国からみても、日本からの支援に軍事・非軍事の壁があるということなどは日本国内の論理でありナンセンスなのである

2年前に米国で、アジア地域から集まった大学生を対象に筆者が日本の防衛態勢を講義した際にフィリピンの学生から質問を受けた。「フィリピンは中国との間で南シナ海の島の領有権をめぐる係争しているが、中国にフィリピンが攻撃されたら日本は助けてくれるか?」「フィリピンを助けるのは同盟国である米国であり日本ではない。ただし米国の同盟国である日本は、フィリピンを助けるために活動する米国を間接的に支援することになるだろう。」と答えたら、「日本はアジア地域のリーダーなのだから、もっと積極的に行動すべきではないか。」という意見が飛び出した。日本から参加していた学生が、私に代わって流ちょうな英語で日本の憲法上の制約などを説明したが、東南アジア諸国の学生からは、日本は地域の大国に相応しい責任を果たすべきだとする意見が多く聞かれた。蛇足ながら、最後に中国人の学生が、中国はフィリピンや他の

な装備の取得が将来的には困難になるだろう。仮に取得が許されるとしても、高いコストの一方で技術的に得るものは少ないということになる。サイバー・セキュリティ、センサー技術、宇宙関連技術、人工知能、無人化/自動技術、素材開発、蓄電技術など、日本が参画し得る分野は数多いと思われる。装備技術の共同開発は米国だけに留まる必要はない。欧州諸国をはじめ、地域の主要なパートナー国であるインド、オー

**米空軍のコア・ミッションの将来**

Fly, Fight, and Win in Air, Space, and Cyberspace		
1947	2015	2035
航空優勢	航空宇宙優勢	柔軟なドメイン・コントロール
航空偵察	情報・監視・偵察 (ISR)	グローバルな統合ISR
航空輸送	迅速なグローバル機動	迅速なグローバル機動
戦略空軍	グローバル打撃	グローバルな精密打撃
協同防空	指揮統制	マルチドメインでの指揮統制

ストラリア、ノウハウが豊富なイスラエルなどが有望であろう。

従来、作戦運用の構想は米国が独自で開発し、日本はその構想に適応していくことが日米の運用協力の実態であった。中国や北朝鮮などによる A2/AD の戦場は我が国の周辺地域である。今後は、運用構想の開発段階から参加し、日米、日米韓などが協力してアジア地域での作戦運用の研究に進化していくことが必要である。次世代に向けた運用構想として、米国は陸、海、空、宇宙、サイバーという5つの作戦領域について、優越な領域の作戦で得られた効果を他の分野で活用していくという「クロス・ドメイン・シナジー」(作戦領域をまたいだ相乗効果)を提唱している。これに「アライアンス・シナジー」(同盟による相乗効果)を掛け合わせて効果を倍加する発想が必要である。昨年ワシントン DC で開催された米空軍協会主催の空軍コンファレンスを聴講した際に、太平洋空軍司令官のロビンソン大將が我が国をはじめとするアジア諸国の空軍トップとともに壇上に立ち、アジア地域諸国との連携の重要性を説いた。その中で大將は、齋藤空幕長との平素からの緊密な意見交換によって自分がどれほど啓発されたかを強調していた。米軍人、政府関係者、軍需産業関係者が主体のコンファレンスだが、我が国が地域における米国の最も重要なパートナーなのだということを示している。

第3に我が国が取り組むべきことは国際法・国際秩序の強化と明確化について地域諸国と協力することである。現在、アジア地域で起きている緊張は、領有権や管轄権に関する秩序に関する係争によるものが大半である。国際法が慣習と妥協による曖昧さを持つことが今日の係争の根本原因であるが、一国の法令とは異なって、国益が競合する多国間で問題を明確に定義し解決することは難しい。問題をさらに複雑にするのは、現状を自国に有利なように変更して既成事実化を図ったり、国内法によって一方的に係争点を自国に有利に規定したりする実態である。こうした一方的な行為を無効化する強制力を持ち得ないことが現代の国際法の限界である。海洋秩序を規定する唯一の国際条約である国連海洋法条約であっても、例え



Lt. Gen. Osamu Onoda (Ret.)'s Lecture  
at Harvard University Asia Center  
Nov. 14 2014

国々に戦いを仕掛けるようなことはしないと語っていた。

第2に我が国が取り組むべきは、米国との装備技術協力及びシミュレーションなどによる運用構想研究の拡大深化を図ることである。米国は急迫する競争相手との技術格差を拡大しようと新兵器の開発、画期的な運用構想や作戦の開発、それを可能にする組織編成や調達機構などの革新に多大な努力を投入し始めた。安全保障分野における日本と米国の研究開発経費には莫大な格差があるが、だからと言って日本にできないことがないわけではない。日本が米国の取り組みに積極的に参画する意志を明らかにしなければ、F-35のような先進的



ば排他的経済水域における外国の軍の活動に関する沿岸国の権限については複数の解釈が存在する。また裁判という解決策が規定されているものの、強制力を持たない。しかも米国では、同条約が自国に不利になる側面があるとして議会の批准が得られていないことから、中国などの一方的な行動への対処について説得力が欠けるという面がある。国際法が多数の賛同国の存在を基本とすることから、中国がアフリカ諸国などに働きかけをしている実態は良く知られており、米国が自国の利益のみに執着すれば、現行の国際秩序を強化することは叶わないだろう。同盟国として我が国は米国に海洋法批准を働きかけていくとともに、日米が協力して国際秩序の強化に努めていかねばならない。

#### 4 おわりに


前項で我が国の地域諸国への協力について非軍事にこだわらないことが必要だと述べた。競争相手が衝いてくるのは対象国の弱点である。米国には非軍事、非国家的な方法や地形や民衆に紛れたゲリラ的な戦術が有効であることは、ベトナム戦争やアフガニスタン、イラクなどを見ても明らかである。一方、治安が不安定な国々にとっては、民衆の蜂起・暴動が脅威となるし、警察力や軍事力が不十分な東南アジア諸国は、例えば南シナ海の領有権に関する係争に見られるように、力

を用いる方法に対してなす術を持たない。我が国は、拒否力としての力を保有しているものの、その積極的な使用への忌避感が国民意識や法制に存在する点が弱点である。逆に、戦後一貫して力に頼らない外交関係に努力してきたことが今日の我が国に対する好印象、高評価に繋がっていることも事実であり、諸刃の剣といえるだろう。我が国の自衛力を真に必要な時に躊躇なく使えるものとするためには、同盟やパートナー国との日常的な連携が重要である。特に互いの長所を生かし弱点を補いあう一体的な関係を構築しておくことが大切であるとともに、環境の変化に対する柔軟な見直しが必要である。地域諸国の能力構築支援、日米の装備技術や作戦運用の連携など、日本が果たすべき役割は益々拡大している。米国との新たな防衛協力のガイドラインを実効足らしめるために、従来の考えを踏まえつつも、従来の考えにとらわれない創造的な発想こそが我が国の新たな役割に必要である。  
(了)

2012年7月に退官。(株)東芝インフラシステムソリューション社顧問。2013年7月から2015年6月までハーバード大学アジア・センターでシニア・フェロー

HARVARD UNIVERSITY ASIA CENTER  
ASIA CENTER FELLOWS SEMINAR SERIES

**JAPAN-U.S. DEFENSE COOPERATION  
AND COLLECTIVE SELF-DEFENSE:  
From a Military Perspective**

 **General Osamu Onoda**  
Lt. General (Ret.) Japan Air Self Defense Force;  
Adviser, Toshiba Corporation Social Infrastructure  
Systems Company; Asia Center Senior Fellow

**Friday, November 14, 2014, 12:15 p.m.**  
S153, 1st Floor, CGIS South Building  
1730 Cambridge St., Cambridge

Co-sponsored by the Program of U.S.-Japan Relations, International Center for Japanese Studies, Harvard University



～ Special contribution of the 20th anniversary of JAAGA ～

**JAAGA創立20周年特別寄稿**  
**JAAGA顧問 廣中雅之**  
**Lt.Gen. Masayuki Hironaka (Ret.)**

JAAGA Adviser



## 米国の国防政策・戦略と航空自衛隊の役割

JAAGA 会員の皆様、こんにちは。この度、JAAGA 創設 20 周年記念誌に寄稿させていただけることを、大変、光栄に思います。私は、昨年 6 月より米国ワシントン DC に所在するふたつの安全保障研究所の上級研究員として研究留学中で、現在、4 つの研究プロジェクトに取り組み、忙しい毎日を送っています。今回は、米国の国防政策・戦略の動向と航空自衛隊の今後の役割と題し米国から報告をさせていただきます。

### オバマ政権の対外政策と戦略

現在のオバマ政権は政権交替を半年後に控え、事実上、政策決定・執行能力を失いつつあります。また、ワシントン DC の多くの前政府高官、専門家、研究者からオバマ政権の政策決定は常にマイクロ・マネジメントであり、米国の威信を著しく傷つけ、国益を害しているとの厳しい批判が繰り返し表明されています。しかしながら、オバマ大統領自身は失政を繰り返しているとは全く認識していません。名門コロンビア大学を卒業し、ハーバード大学の法律学大学院で学び、弁護士となった後、上院議員を経て若くして大統領となったオバマ大統領は、近來まれにみる優秀な実務家です。更に、オバマ政権はホワイト・ハウスの国家安全保障会議(NSC)に優秀な政策立案集団を擁しています。一時期、この NSC のスタッフは 450 名以上になりましたが、削減の努力をしつつも、現在でも約 400 名



のスタッフが NSC で勤務しています。政権末期を迎えている現在、オバマ政権は、大統領としての歴史的偉業を達成することに主眼をおき、次々に生起する事態に対して実務的に対応し成果を上げることこそが米国に最も必要だと認識しています。オバマ大統領が、生起する事態に対し常にベストの政策

決定をしていると大いに自負していることに疑いの余地はありません。

しかしながら、客観的に俯瞰すると、ロシアのウクライナへの干渉の許容、シリアへの中途半端な関与、IS に対する空爆開始の遅れや南シナ海への積極的な関与の遅れなど、明らかに米国のリーダー・シップの発揮が不十分であり、対外政策の失敗だと思われる政策案件が多々あります。何故、オバマ政権の対外政策にかかる政策決定が不相当だと厳しく批判されるのか。その最も大きな理由は、戦略がなく、状況対応型の政策決定を行っていると言うことにつきます。大統領就任後、4 年後、8 年後の米国を如何なる状況にし、そのために如何なる政策が必要かと言う中長期的な方針に基づく政策決定をしていないと言うことです。中長期的な戦略を構築するためには、世界の中での米国の立ち位置をいつまでにどのようにするかという明確な最終目標 (End State) を示さなければなりません。この最終目標は、米国の政治指導者のみが示し得るものです。数年前にオバマ大統領が出した「もはや米国は世界の警察官ではない」という声明は、本来は 8 年前の大統領選挙で米国民に示し、共有してもらうべき世界観であったと思います。現在の激しい政策批判の状況を見る限り、少なくとも、米国の対外政策の根本を変えることに繋がるこの大方針が国民的な支持を得ているとはとても思えません。オバマ政権の政策に対する歴史的評価は、現政権の自己評価とは全く異なると思います。

さて、NSC のスタッフは大統領に対し戦略的な助言をするのが最も重要な仕事ですが、多過ぎるが故に戦略の構築、展開のみに集中できず、大統領に対し適切な助言ができていません。NSC のスタッフが、本来、国防省・米軍が行うべき IS に対する空爆の目標選定作業 (Targeting) などの戦術的な仕事のみをしていると揶揄される所以です。リベラルを標榜する民主党のオバマ大統領は、基本的に軍を信用しておらず、軍との関係をあまり重視していません。法律上、大統領に対する最高の軍事的な助言者は、国防長官と統合参謀本部議長とされていますが、オバマ大統領は大統領就任以来のさまざまな軍事的な政策判断の際、米軍を代表するこのふたりの助言者と率直な意見交換をせず、NSC のスタッフの助言のみを重視してきたようです。事実、現政権が軍事的な政策判断をホワイト・ハウス主導で独善的に行っているという批判は根強く、関係者間では、現在、ホワイト・ハウスと国防省(米軍)との関係は円滑な意思疎通が全くできていない最悪の関係にあると言われています。



## 米国の国防政策・戦略の方向性

世界最大の政治、経済及び軍事力を持つ米国の行政府の長であり、かつ、米軍の最高司令官(Comander in Chief)である米国大統領に誰になるかによって、米国の対外政策、戦略が変わり、内外に大きな影響を与えることが予想されることから、高い関心が寄せられるのは当然です。現在、政治の街ワシントン DC は、数か月後の新大統領の誕生を控え、行政府、議会は、新たな対外政策を打ち出し、推進していくという状況にはありません。新政権が対処すべき課題と処方箋については、多くのシンクタンクでは既にほとんどの研究は終わっています。今後、本年 11 月、本選挙の終了後に正式に発足する政権移行チームによる新政策・戦略の立案にどのような形で盛り込むかという戦術的なレベルでの諸準備が、約 3,200 ～ 300 名と言われている政治任用の幹部公務員の人事構想とともに検討が開始されています。



実は、新大統領が誕生すると、直ちに米国の対外政策・戦略が劇的に変わるという訳ではありません。米国の会計年度は、10月から翌年の9月末までですが、新政権誕生時には現政権が決定する2017年度国防予算は既に執行中であり、緊急事態の発生時の対処を除き、新たな政策・戦略を急に打ち出しても十分な予算上の裏づけのない政策は具体化しません。更に、新大統領が就任する来年1月20日の時点では2018年度国防予算案の骨格もほぼ概成していることから、新政権の新たな国防政策・戦略が明示的に具体化されるのは、実際には一年半後の2019年度国防予算からと言うこととなります。また、外交・安全保障政策の一貫性を保つため、現国防長官の続投も予想されることから、先ずは、2017年度国防予算案の特徴をしっかり把握しておくことが肝要です。

3月上旬～4月上旬、約1ヶ月の間、国防省関係者(国防長官、国防副長官、統合参謀本部議長、国防次官補など)による2017年度国防予算案にかかる対外説明がワシントンDCの安全保障研究所などで繰り返し行われました。ここ数年、国防省はテロとの戦いを収束させる一方、グローバルな安全保障環境の変化への対応の必要性を深刻に認識し始めたと言われています。現在、検討中の第3の相殺戦略(3rd Off Set Strategy)の概念は、こうした背景の下で生まれたものであり、主として軍事作戦、戦術の革新とその前提となる軍事技術革新を目指しています。加えて、国防省は、近年の厳しい国防予算削減を踏まえ資源の集中投下の必要性を深刻に認

識するとともに議会による追加の強制削減措置に対する警戒を強めています。国防省は、3rd Off Set Strategyの構築を国防省の最優先課題として真剣に取り組もうとしています。国防省が考える米国の中長期的な戦略の方向性は、「財政問題に対処しつつ、核抑止力(Nuclear deterrent capability)と戦力投射能力(Global strike capability)を中核とする攻勢戦略を再構築し、引き続き軍事的優越性を維持する」というものです。

これらを具体化していく3rd Off Set Strategyは、未だ明確な戦略構想として確立されてはいません。他方で、新政権による新たな国防政策・戦略の方向性は、遅くとも来年夏までには明らかにされます。国防省は、3rd Off Set Strategyの構築を急いでいますが、残された時間はあまりありません。2017年度国防予算案は、検討中の第3の相殺戦略の初年度の投資として、少ない予算ではありますが戦略原潜やB-21戦略爆撃機の開発など戦力投射能力の再構築に関係するいくつかの重要な兵器調達決定をしています。また、戦略環境の劇的な変化の中で新たな方法と行為が求められるという認識が示されており、ロシア、中国、北朝鮮、イラン及び地球規模のテロリスト・ネットワークが、米国が直面する5つの戦略的な挑戦と優先順位が付されています。これらの考え方の下で、グローバルな展開能力の再構築と高度な兵器システムの開発は、平時のプレゼンスの維持よりも優先するとされています。また、同盟国、友好国への関与(Commitment)の重要性が改めて指摘されつつも、米国の国益に叶うかと言う冷静な計算(Calculation)の必要性が併せて指摘されています。

## 航空自衛隊の役割

米国から眺めていますと、昨年の平和保障法制の策定にかかる議論のように「米国の力が弱くなったので日本が米国を助けなければならない」という大きな誤解が日本にはあるように思います。米国の世界第一位の国民総生産17兆9680億ドルは引き続き伸び続けていますし、現在、3億1445万人の人口も増え続けています。米国の力は決して弱くなっていません。本年2月に発表された2017会計年度国防予算案は、1.9%減ったとは言え5239億ドル、日本円に換算すると約60兆円です。更に、軍事技術の開発にかかる基礎研究の経費は別枠で10兆円以上計上されていると言われています。言うまでもなく、世界には安全保障上の課題が数限りなくあり、超大国米国であっても全ての課題に100%対処することはできないので、要は優先順位をつけるということだろうと思います。米軍は自衛隊の支援を前提とする作戦を行おうとは決して思いませんが、一緒に仕事がしたいと強く願っています。我が国は、世界の政治、経済に引き続き大きな影響力を及ぼすこの強大な国と同盟関係にあります。

米国は強大な軍事力を全世界に展開して、その抑止力を示し、あるいは必要な時には戦闘力を行使して、その地域の平和と安定を維持しています。我が国は米国の同盟国として、条約上、可能な限りの対米協力を履行しなければなりません。日米安保条約の締結の経緯を振り返ると、東西冷戦下で米国の封じ込め政策が背景となって締結され、日本はソ連の膨張政策に対する極東地域における防波堤として重要な役割を果



たしました。陸上自衛隊は、1980年代の終わりまで、北海道に対する極東ソ連軍の侵攻を如何に防ぐかということを中心に、北海道に主力部隊を展開し、猛訓練をして、その存在感を十分に発揮しました。海上自衛隊は、ソ連海軍の太平洋への進出を防ぐため、宗谷海峡、津軽海峡及び対馬海峡の封鎖に備え、また、航空自衛隊は、極東ソ連軍の軍用航空機による偵察活動や示威活動に対し、厳正な対領空侵犯措置を行って来ました。

冷戦後、日米同盟は、特定の仮想敵ソ連に対抗する同盟関係から、アジア・太平洋地域及び国際社会の秩序と安定を保つための同盟へと、その役割を大きく変化させます。自衛隊の活動の場が拡大し、限定的ではあるものの米国の同盟国としての国際貢献活動などを積極的に行い、価値観を共有する国家として適切な役割を果たしてきたと思います。海空自衛隊の弾道ミサイル防衛や海上自衛隊の国際テロへの対応や海賊対処活動は明らかに眼に見える形で日米同盟の緊密化に大きく貢献しています。しかしながら、1997年に改定された日米防衛協力の指針に基づく日本周辺事態における自衛隊の米軍に対する協力については、地理的な制限があるなど、およそ防衛力運用の原則からかけ離れたものでした。

我が国における昨年までの一連の安全保障政策の改革は、集団的自衛権の解釈変更及び関連法案の成立がその中心ですが、現下の厳しい国際安全保障環境の下で、過去の活動の教訓を踏まえて現行の安全保障法制の欠陥を抜本的に是正するという必然の改革でした。これらの改革は、現行法制下で、日米同盟を有効に機能させるための日本の法制面の準備が概ね整ったということを意味します。今後、航空自衛隊は、この新たな法制に伴い拡大する役割に沿う任務を果たせるよう、しっかり訓練を行い、万一の事態に備えなければなりません。



自衛隊は国内法制上、軍隊ではありません。しかしながら、厳しい国際安全保障環境の下、今後、行政組織でありながらも、限りなく諸外国軍隊に近い役割を果たすことが、求められています。航空自衛隊が、これまで果たしてきた任務と役割は、冷戦の時代及び冷戦後の時代のいずれにおいても、明らかに国防組織としてのものでした。もちろん、航空自衛隊は、これまで、憲法並びに我が国国内法を逸脱した活動をしたことは一度もなく、法治国家における国防組織として、愚直なまでに法律を遵守して諸活動を行ってきています。しかしながら、本来、軍事行動として行うべき対領空侵犯措置の実態に鑑みれば明らかのように、法理と現実の対処に大きな乖離が生じ

ていることも事実です。真に国民の生命と財産を守るための自衛隊の行動を、より適切にするために、我が国においても武力の行使にかかる考え方を、そろそろグローバル・スタンダードなものにしていく必要があると思います。

冷戦時代、航空自衛隊は、厳正な対領空侵犯措置を通じて、米国の封じ込め政策の下で日米同盟の一翼を担い、対ソ戦を想定した抑止力を大いに発揮しました。しかしながら、近年の核搭載可能な長射程空対地ミサイルを装備するロシア、中国の戦闘爆撃機の配備は、航空自衛隊の対領空侵犯措置の軍事的な効果に根本的な疑問を投げかけています。当面、日米同盟の下で有効な抑止力を発揮し、万一、緊急事態が発生した場合には適切な拒否力を発揮する航空自衛隊の任務と役割は、基本的に変わりません。そのため、空の主権を守る国防組織としては、第一義的に軍事的な効果を追求する必要があります。航空自衛隊はより高度な戦闘能力の向上を期すため、これまで、任務の中核であった対領空侵犯措置にかかる態勢の抜本的な見直しを行い、新安全保障法制の策定に伴う海外活動やサイバー、宇宙空間での活動などの新たな任務への資源の再配分について真剣に検討する必要があります。

## 結言

航空自衛隊は半世紀以上の間、様々な活動や交流を通じて、米空軍との間に極めて強い連帯感を作り上げてきました。日米の安全保障に関する政策協議は、日米首脳間で、また、日米防衛首脳会談や日米安全保障協議委員会、高級事務レベル協議などを通じて適宜行なわれており、また、統合幕僚長、航空幕僚長をはじめとする実務レベルにおいても随時の協議や必要な情報交換等が緊密に行われています。私は、約35年余の幹部自衛官としての勤務の間、日米協議に直接的に携わり、また、数度の米国留学も経験をしています。そのような経験を通じて、米軍人と自衛隊員の間では、共に持っている高い専門性と国家に対する忠誠心を互いに深く尊敬できる関係となっていると確信しています。

航空自衛隊の創設、発展に関し、物理的にも精神的にも絶大な支援を惜しまなかった米空軍との関係は航空自衛隊の素晴らしい財産です。今後、益々、円熟化する日米同盟の下で、いざと言う時に共に戦ってくれる米空軍の関与を確実にするためには、米国に日本に何を期待するかと問う受け身の対応をやめ、自ら為すべきこと考え、積極的に行動することが最も重要であると思います。JAAGA会員の皆様のご健勝と後輩諸君の益々の精進を期待して私の報告を終わります。(了)

2014年8月に退官。伊藤忠商事(株)顧問。

2015年6月より米国ワシントンDC駐在、日本再建イニシアティブ(RJIF)上級研究員(於、日本)、アメリカ安全保障研究所(CNAS)上級研究員、笹川平和財団・米国(SPF USA)安全保障・外交問題研究員(於、ワシントンDC)



## 新入会員紹介

### 1 正会員

氏名	住所	氏名	住所
新谷 和也 氏	茨城県かすみがうら市	中山 邦光 氏	沖縄県那覇市
齊藤 治和 氏	埼玉県上尾市	福永 充史 氏	東京都府中市
杉山 政樹 氏	長野県諏訪市	清水 俊和 氏	埼玉県桶川市
半澤 隆彦 氏	東京都目黒区	山口 浩樹 氏	埼玉県草加市
下平 幸二 氏	埼玉県越谷市	村上 和彦 氏	東京都世田谷区
吉田 浩介 氏	東京都中野区		

### 2 個人賛助会員

氏名	住所	氏名	住所
清水 一平 氏	山梨県甲斐市	中村 勤 氏	東京都日野市
小田部 哲哉 氏	東京都小金井市	内尾 祐司 氏	島根県出雲市
中谷 光夫 氏	千葉県浦安市		

### 3 法人賛助会員

会社名	住所	代表者
ノースロップ・グラマン・インターナショナル・インク	東京都千代田区	Stan Crow 氏

## 【会員募集】

今期は関係各位のご努力で正会員 11名、個人賛助会員 5名、法人賛助会員1社の合計 17名(社)の入会を得ることができました。

H28.7.13 現在、正会員数 252名、個人賛助会員数 73名、法人賛助会員数 43社となっております。引き続き会勢拡張を目標として、精力的に活動してまいります。

今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。

推薦若しくは情報提供を頂いた方には直接会員担当理事から連絡させていただきます。

#### 【入会資格】

正 会 員：航空自衛隊のOB

賛 助 会 員：航空自衛隊のOB以外の方。正会員 3名の推薦が必要です。

#### 【連絡先】

○郵便 〒160-0002

東京都新宿区四谷坂町9-7 ZEEKS 四谷坂町ビル3F

日米エアフォース友好協会 会員係

○メール

membership@jaaga.jp



## 平成28年度役員

職 名		氏 名	
会 長		岩 崎 茂(新)	
副会長		森下 一(新)、渡邊 至之(新)、長島 修照(新)	
理 事 部	理 事 長	小野田 治	
	副理事長	山崎 剛美	
	企 画	平田 英俊、中島 邦祐、清藤 勝則 半澤 隆彦(新)、上田 知元(新)、杉山 政樹(新)	
	総 務	秦 啓次郎、福井 正明、糸永 正武 狩集 貴尚、若林 秀男、岩成 真一(新) 横谷 薫(新)	
	渉 外	石野 次男、阪東 政詮、新井 洋一 谷井 修平、岩本 真一、藤田 信之	
	会 員	小野田 治(兼)、森田 公治、米沢 敬一 木村 孝、伊藤 哲(新)	
	広 報	山本 康正、早坂 正、杉山 伸樹 渡部 憲政、木村 和彦、福永 充史(新)	
	財 務	山崎 剛美(兼)、阿部 英彦、日吉 章夫 内山 隆弘(新)	
監 事		野田 耕平、池田 勝(新)	
支部役員	支部長	丸山 泰(三沢)	石津 靖(沖縄)
	支部事務局長	山本 親男(三沢)	木村 貞夫(沖縄)
顧問(HP担当特任)		四ッ家 邦紀	
顧問(在米特任)		廣中 雅之	

注：(新)は新任、(兼)は兼務

## 【編集後記】

- ◇ 50号は、JAAGA 創立 20 周年記念特集号です。
- ◇ 当然！ 記念特集関連記事が満載です。また、今号も、空幕教育課のご協力を得て、米国交換将校(航空自衛隊幹部学校、第1輸送航空隊)ご本人による紹介記事を掲載致しました。本企画は、次号以降も、続けていく予定です。
- ◇ 指揮官氏名、階級等は、記事当時のものです。
- ◇ 『JAAGA だより』は JAAGA ホームページ(<http://www.jaaga.jp/>)からもご覧頂けます。
- ◇ だより編集員一同、今後もJAAGA の活動を地道にフォローしていきたいと思っておりますので、会員及び現役の皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い致します。
- ◇ JAAGA 創立 20 周年記念行事の準備段階から深く携わってこられた故上田完二前副会長のご冥福をお祈り申し上げます。

(編集子)

